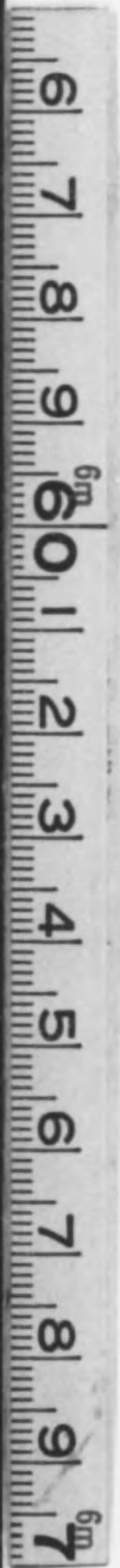


續國譯漢文大成

文學部 三十二

309  
65

續  
入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏 寄贈本

文學部 第三十二册 (第八帙の四)  
韓退之詩集 下の四



蘇園集英文大宛

韓昌黎集補遺

外集詩五首

韓文、即ち世に通行せる韓愈の全集は、計四十卷、その初に、詩十卷が載せてあつて、その詩は既に解釋を終つたのである。なほ右四十卷の外に、外集があり、順宗實錄があり、遺文があつて、外集遺文の中にも、少數ながら詩が交つて居るから、順注本の如き、詩集だけ抜いたものには、外集詩・遺詩といふ順序で、これを附載してある。その外、文集中に序と一緒に成つて居て、詩集に入れないものが五六首あつて、これを最後に附載してある。順注本には、卷十一としてあるが、ここでは、特に改めて補遺として置いた。

芍薬歌

芍薬の歌

丈人庭中開好花。 丈人庭中、好花開く、

芍薬歌

【字解】 (一) 丈人 年長者の尊稱。

(二) 凡木 普通の花木桃李の類を

更無凡木爭春華。更に凡木の春華を争ふなし。  
 翠莖紅藥天力與。翠莖紅藥、天力與ふ。  
 此恩不屬黃鍾家。この恩、黃鍾の家に屬せず。  
 溫馨熟美鮮香起。溫馨は熟美に、鮮香は起る。  
 似笑無言習君子。笑ふに似て言なく、君子に習へり。  
 霜刀翦汝天女勞。霜刀、汝を翦つて、天女勞す。  
 何事低頭學桃李。何事ぞ頭を低れて、桃李を學ぶ。  
 嬌癡婢子無靈性。嬌癡の婢子、靈性なし。  
 競挽春衫來比竝。競うて春衫を挽いて、來つて比竝す。  
 欲將雙頰一睇紅。雙頰を將て、一たび紅を睇かさむと欲す。  
 綠窻磨徧青銅鏡。綠窻磨いて徧ねし青銅鏡。  
 一罇春酒甘若飴。一罇の春酒、甘きこと飴の若し、  
 丈人此樂無人知。丈人の此樂、人の知るなし、

【一】 黃鍾家 黃鍾は音律の名、つまり絶えず音樂などを奏して居る富貴の家。  
 【二】 溫馨熟美 芍藥の花の薫りの高きを形容して云ふ。  
 【三】 霜刀 その嬌刃の色霜の如き小刀。  
 【四】 嬌癡 たなやかにして癡態を帶ぶ。  
 【五】 比竝 比較する。  
 【六】 楚狂 楚狂は接輿、孔子の門を過ぎて風合を歌ひしこと、論語、莊子に見ゆ。  
 【七】 小子 論語に吾黨小子とある。

花前醉倒歌者誰。花前醉倒、歌ふものは誰ぞ。  
 楚狂小子韓退之。楚狂小子韓退之。

【題義】 蔣注に「或本には刪り去る。今恐らくは、公の少作に似たり、しばらく之を存す。一本に芍の字の上に王司馬紅の四字あり、王司馬は誰なるかを詳にせず、貞元中、公亦た芍藥の一絶あり、乃ち元和十年知制誥たりし時の作、これは、その作の時日を知ること能はず」とある。貞元中に芍藥の一絶があつて、元和十年の作といふのは、譯が分からない、蓋し貞元中とは、正集中の誤であらう。  
 【詩意】 王司馬の庭中に於て、一種の好花が開いて居るが、外に平凡の木の春華を争ふものなく、全くこの芍藥の獨占に任かせてある。芍藥の花たるや、翠莖紅藥、色彩の配合は、極めて見事で、取りも直さず造化の力を以て付與したものと見えるが、天は決して富貴の家に私して、この名花を屬せしむることなく、風流にして花を愛する丈人なればこそ、特に之を屬さしめたのである。その芍藥の新鮮なる香は、温かく馨ばしく、そして成熟し切つて、まことに甘美であるし、その花の姿を見ると、笑ふが如くして、しかも言葉なく、全く君子を真似て居る様である。天女は、霜刀を以て汝を翦り、やがて、上界に攜へ歸らうと思つて居るのに、如何なれば、汝は、首をうなだれて、桃李と同じ様に、羞らふ様な身ぶりをして居るか。なまめかしくして癡態を帯びたる侍婢どもは、もとより、一點の靈

性もなく、依然として人間ばなれをせぬ處から、競うて紅の春衣を挽いて、花の色に比較し、はては花に類ずりをして、露にぬれたといつて、その紅の痕を乾かさむとし、つと縁窓の中に駈け入れば、そこには、青銅の鏡が磨き立てられて、光明登朗として居る。一罇の春酒、甘きことは飴の如く、留賞して日を送るのは、まことに愉快極まることであるが、丈人の此樂を善く知つて居る人はない。ここに、花前に酔倒して、歌を作つて、聊か丈人の爲に氣焰を揚げるのは、誰かといへば、かの楚狂接輿に似たる小豎子の韓退之、即ちかく申す某である。

【餘論】これより以下の詩に就いて、蔣注には、評語を著くこと極めて稀であるし、顧注には、朱竹垞・何義門の二家、ともに、更に一辭を著けず、又唐宋詩醇にも、少しも抄録しないから、前人の見解は、全く窺ふことが出来ず、私見を以て、さかしらを加へるの外なきを遺憾とする。この詩は、なる程、韓愈の少作に相違なからうと思はれ、詞筆稍や嫩にして、極めて平易、そして、苦心刻劃の痕が無い。嬌癡婢子無靈性の一解は、極めて巧麗で、作者に於ては、稀に見るところといふべく、結末も、亦た聊か振つて居る。しかし、趙甌北は「昌黎の詩、亦た晦澁俚俗、法と爲すべからざるものあり、芍藥歌に云ふ、翠莖紅藥天力與、此恩不屬黃鍾家、謂はゆる黃鍾家は、果して何を指すか」と云つて、その造語の稍や無理なことを非難して居る。

海水

海水

海水非不廣。鄧林豈無枝。  
風波一蕩薄。魚鳥不可依。  
海水饒大波。鄧林多驚風。  
豈無魚與鳥。巨細各不同。  
海有吞舟鯨。鄧有垂天鵬。  
苟非鱗羽大。蕩薄不可能。  
我鱗不盈寸。我羽不盈尺。  
一木有餘陰。一泉有餘澤。  
我將辭海水。濯鱗清冷池。  
我將辭鄧林。刷羽蒙籠枝。  
海水非愛廣。鄧林非愛枝。  
風波亦常事。鱗羽自不宜。

海水、廣からざるに非ず、鄧林、豈に枝なからむや。  
風波、一に蕩薄、魚鳥、依るべからず。  
海水には大波饒く、鄧林には驚風多し。  
豈に魚と鳥となからむや、巨細各、同じからず。  
海には吞舟の鯨あり、鄧には垂天の鵬あり。  
苟くも鱗羽の大なるに非ざれば、蕩薄能くすべからず。  
我が鱗は寸に盈たず、我が羽は尺に盈たず。  
一木、餘陰あり、一泉、餘澤あり、  
我、將に海水を辭し、鱗を清冷の池に濯はむとす。  
我、將に鄧林を辭し、羽を蒙籠の枝に刷せむとす。  
海水は廣きを愛むに非ず、鄧林は枝を愛むに非ず。  
風波、亦た常事、鱗羽、自ら宜しからず。

我鱗日已大。我羽日已修。 我が鱗、日すでに大、我が羽、日すでに修し。  
風波無所苦。還作鯨鵬遊。 風波、苦むところなく、還た鯨鵬の遊を作す。

【字解】 〔一〕 鄧林 前に納放聯句に見ゆ。列子に「夸父、日影を朔谷の際に逐ひ、渴して飲を欲し、赴いて河渭に飲む。河渭、足らず。將に北に走つて大澤に飲まむとす、未だ至らず。道に渴して死す。その杖を棄つ。尸の膏肉、浸すところ、化して鄧林となる」とある。〔二〕 蕩薄 動き迫る。〔三〕 驚風 雷いた様に俄に吹く風。〔四〕 吞舟鯨 文選吳都賦に長鯨吞舟とある。〔五〕 垂天鵬 莊子の逍遙游に鵬を記して「その翼、垂天の雲の如し」とある。〔六〕 蒙籠枝 葉の密生して居る枝。

【題義】 蔣注に「水の下、或は詩の字あり、詩意を觀るに、謂ふ、當時足を託するの地なく、還歸の興なしと。豈に貞元及第の後、江南に歸る時作れるか」とある。韓愈が進士に及第したのは、貞元八年で、その後、三たび博學宏詞の試に應じたけれども、成功しなかつた。そして、河陽に歸省したのは十年、その翌十一年は、歸省の後、轉じて洛陽に往つて仕舞つた。蔣注に「江南に歸る」とあるは誤で、河陽と訂正せねばならぬ。

【詩意】 海水は廣くなく、鄧林には枝の無い譯でもないが、海には波あり、林には風あり、一たび蕩薄すれば、魚鳥は其處に依つて安んずることが出来ない。それも、普通の風波ならば未だしも、海水には大波多く、鄧林には驚風多く、もとより、其處に栖んで安んじて居る魚鳥もあるが、尋常の者とは、眞然として小大相異なつて居る。げにや、海には、一口に舟を呑むといふ様な長鯨が居るし、鄧

林には、その翼、垂天の雲の如しといはれる様な大鵬が休んで居る。苟くも、鯨鵬の如き鱗羽の極めて大なるものに非ざれば、とても、自分から、風波を蕩薄することが出来ない。然るに、魚鳥として我を視ると、極めて瑣細なもので、我が鱗は一寸に盈たず、我が羽は一尺に盈たず、一樹の陰に休んでも、その陰が餘ある位、一泉に飲んでも、その澤が餘る位。されば、もつと小さい處に住んで居る方が善いので、我は將に海水を辭して、鱗を清冷の水を湛へたる池に濯はむとし、將に鄧林を辭して、羽をこんもりと葉の茂つて居る枝に刷はうと思つて居る。海水とても、もとより我に向つて、その廣きを惜む譯でもなく、鄧林とても、もとより我に向つて、その枝を惜む筈がないが、風あり波あるは、普通の事で、我我の様な小さい鱗羽を持つて居るものには適當しないから、我が方から、遠慮して、他處に移らうといふのである。しかし、我が鱗は、日に大くなり、我が羽は、日に長くなり、いつまでも、この儘でも居ないから、やがて、風波に苦まぬやうになれば、又ぞろ、ここに來て、鯨や鵬と同じ様に遊んで居たいと思ふので、マア暫らくの間、御別をする次第である。

【餘論】 題を海水としたのは、例の如く、唯だ起首の二字を取つたのである。篇中、海水と鄧林、これに對して、風波・魚鳥・鱗羽・鯨鵬を借ひ來り、すべて對偶をなして、層層遞下して居るのは、一種の章法である。抑も中央政府は、まことに結構であるが、微才子の如きものでは、とても勤まり切らないから、今の處、地方藩鎮に出かけて、仕事を見習ひ、やがて追迫成熟し、練習したならば、是非、

中央政府へ還つて来て、今の世に時めく公卿摺紳と一緒に周旋したいといふのが、全篇の寓意で、現に韓愈は、追追この言を實行したのである。

贈崔立之

崔立之に贈る

昔者十日雨、子桑苦寒饑。  
 夜歌坐空屋、不怨但自悲。  
 其友名子輿、忽然憂且思。  
 褰裳觸泥水、裹飯往食之。  
 入門相對語、天命良不疑。  
 好事漆園吏、書之存雄辭。  
 千年事已遠、二子情可推。  
 我讀此篇日、正當雨雪時。  
 吾身固已困、吾友復何爲。

昔者十日の雨、子桑、寒饑に苦む。  
 夜、歌うて空屋に坐し、怨まず但自ら悲む。  
 その友、名は子輿、忽然として憂へ且つ思ふ。  
 裳を褰げて泥水に觸れ、飯を裹んで往いて之に食はしむ。  
 門に入つて相對して語る、天命良に疑はず。  
 好事漆園の吏、これを書して雄辭を存す。  
 千年、事、すでに遠く、二子情推すべし。  
 我、この篇を讀むの日、正に雨雪の時に當る。  
 吾が身、もとより已に困む、吾が友、復た何をか爲す。

薄粥不足裹、深泥諒難馳。

薄粥、裹むに足らず、深泥、諒に馳せ難し。

曾無子輿事、空賦子桑詩。

かつて、子輿の事なく、空しく、子桑の詩を賦す。

【字解】「二昔者十日雨」この十句の事は、莊子の大宗師に出て居る「子輿、子桑と友たり、而して、霖雨十日、子輿曰く、子桑殆んど病みたりと。飯を裹んで往いて食せしめむとす。子桑の門に至れば、歌ふが若く、笑するが若し。琴を鼓して曰く、父か母か、天か人か、と。その聲に任へずして、趨つて、其詩を擧ぐるあり、子輿入つて曰く、子の詩を歌ふ、何の故に是の如くなる。曰く、吾、かの我をして此極に至らしむるものと思つて得ざるなり、父母豈に吾が貧を欲せむや。天は私に覆ふなく、地は私に載するなし。天地、豈に我を貸しうせむや。その之を爲すものを求めて得ざるなり。然り而して、この極に至るものは命なるかな」とある。【三】褰裳、裳は下衣、それを捲くり上げる。【四】裹飯、飯を包む。【五】好事、物數寄。【六】漆園吏、史記老莊申韓列傳に「莊子は蒙人なり、名は周、周、かつて蒙の漆園の吏となる」とあつて、正義に「括地志に云ふ、漆園の故城は、曹州冤句縣北十二里に在り」と。ここに、莊周、漆園の吏なりと云ふは、即ち此、按ずるに、この城、古しへ蒙縣に屬す」とある。【七】書之、莊子が大宗師の篇中に書き込んだといふこと。

【題義】この詩は、崔立之に贈つたので、何時といふことはつきり分からねが、二人とも、まだ就職せぬ時分であらうと思はれる。蔣注に「公の集、立之と唱和最も多し。贈崔立之評事あり、酬崔二十六少府あり、寄崔二十六立之あり、雪後寄崔二十六丞公あり、而して、この詩は、乃ち外集に見ゆ。又酬藍田崔丞詠雪之作あり、世傳へて、以て集後に附すと云ふ」とある。なほ、この篇は、文苑英華から此に轉載したのである。



【詩意】むかし、十日も雨が打つづけて降つた時、子桑は、寒くして衣なく、饑えて食なきに苦み、悲しげな聲で歌ひつづ、ひとり空屋の中に坐つて居たが、その心、誰を怨むともなく、唯だ自ら我を貧しくした其運命を悲んで居た。ここに、子桑の友の子輿といふものは、忽然として子桑の事を思ひ出して、心配に堪へず、やがて、裳を捲くり上げて、泥水に觸るるを顧みず、又飯を包んで、持つて往つて之に食はしめむとし、門に入つて、相對して語り、何事も天命に任かせる外は無いつて、更に疑ふところが無かつた。すると、物數寄な莊子といふ人があつて、この事を其著の中に書き込んだが、その立派な文章は、今までも残つて居る。この事たるや、すでに千年を隔てて、はるか昔に成つて仕舞つたが、子桑、子輿、二人の情義は、今からでも推知することが出来る。われ、偶ま莊子の書を読んだが、その折しも、みぞれが降つて来て、書中の事實と極めて相似て居る。それで、吾が身さへも、すでに弱り切つて居るが、吾が友はどうして居るか、是非尋ねて見たいと思ふが、薄い粥は包んで持つて行くことも出来ず、道路は泥深くして、なかなか馳せて行くことが出来ない。されば、裳を褰げ、飯を褰んだといふ子輿の事は、全く之なく、唯だ子桑が歌つた様な悲しげな詩を賦して、君に贈る次第である。

【餘論】前半十二句は、莊子に見えた事實。後半十句は、二人の境涯が恰も相似て居るが、往つて尋ねることが出来ないから、詩を贈るといふ意を述べたのである。語意ともに眞摯なれども、詩としては、甚だ平淺凡近である。蔣之翘は「山谷の詩に次韻楊明叔見餓あり、云ふ、桑與金石交、云云、事意皆公の此詩と同じ」とある。これは、同題十首の中の第五首で、その全篇は、左の通りである。桑與金石交。既別十日雨。子輿裹飯來。一笑相告語。楊子困簞瓢。諸公不能舉。倘可從我歸。沙頭駐鳴鶴。

贈河陽李大夫

河陽の李大夫に贈る

四海失巢穴、兩都困塵埃。  
 感恩由未報、惆悵空一來。  
 裘破氣不暖、馬羸鳴且哀。  
 主人情更重、空使劍鋒摧。

四海、巢穴を失ひ、兩都、塵埃に困む。  
 恩に感ずるも、なほ未だ報いず、惆悵、空しく一たび來る。  
 裘は破れて氣暖かならず、馬は羸れて、鳴いて且つ哀し。  
 主人情更に重し、空しく劍鋒をして摧けしむ。

【字解】(一) 巢穴、鳥に巢あり、獸に穴あるが如く、おのが住家。(二) 兩都、長安と洛陽。(三) 由、古しへ爾と相通ず。(四) 馬羸、馬が瘦れる。

【題義】この李大夫は、李瓦といふ人だらうといふことで、舊唐書の本傳に「李瓦、字は慶初、趙郡



の人、德宗位を嗣ぎ、檢校太常少卿兼御史中丞河陽三城鎮遏使を加へ、一年を聞て、檢校左庶子河陽三城懷州節度使を加へらる」とある。それから、蔣注に「凡は、德宗の初、河陽節度使たり、公年十二、大曆十四年に當り、伯兄會に隨つて嶺表に遷る、會卒し、鄭嫂に從つて、歸つて河陽に葬る、時に李希烈・李惟岳・田悅・梁崇義・朱滔の徒、相繼いで變を煽し、中原騷然たり。故に祭鄭嫂文に云ふ、既克反葬、遭三時艱難」と。而して、この詩にも、亦た四海失巢穴の句あり、時に年十四五。公、かつて自ら言ふ、十三にして文を能くすと。恐らくは、或は然らむ」とある。すると、この詩は、建中二三年の頃、韓愈が嫂鄭氏と共に河陽に歸葬した時、賦して河陽の節度使李凡に贈つたのである。

【詩意】われは、兄の貶謫に從つて、嶺南に至り、兄が死んでから、ここに歸葬したので、四海の内、定住すべき住家もなく、おまけに、長安洛陽、ともに戰塵の地を捲いて起るに苦み、今しも、兵戈騷擾の世の中である。われは、亡兄が鞠育の恩に感ずるものから、未だ之を報い得ず、ここに其喪を護し、惆悵して、やつと此までたどり着いた始末。久しい旅をする間に、裘は破れて、肌に觸るる氣は暖かならず、馬は疲れて、悲しげに嘶いて居る。さて今後どうしたものかと思ひ煩ふ折から、李公の御厚情は、まことに感謝すべく、どうやら、ここに落ち付くことが出来たので、その情の重きに對しては、劍鋒を摧くとも厭はないとさへ思つて居る。

【餘論】蔣之翹は「結處、悲中却つて自ら壯氣あり」と云つて居る。この詩は、半古半律の一體で、空の字の二つあるのは、まことに目につくが、十四五歳の少年の作としては、流石に偉いものである。

苦寒歌

苦寒の歌

黄昏苦寒歌

黄昏寒に苦んで歌ひ、

夜半不能休

夜半休む能はず。

豈不有陽春

豈に陽春あらざらむや、

節歲聿其周

節歲聿に其れ周らむ。

君何愛

君何ぞ愛む、

重裘兼味養大賢

重裘兼味、大賢を養へ、

氷食葛製神所憐

氷食葛製、神の憐むところ。

填窓塞戶慎勿出

窓を填め戸を塞いで、慎んで出づる勿れ、

暄風暖景明年日

暄風暖景、明年の日。

【字解】【一】陽春 春は陽氣盛なるが故に云ふ。【二】聿其周 終には循環して来る。【三】君何愛 この下に脱落があるので、もしかすると、五言二句、即ち十字あつたのが、この三字だけ残つたのかと思はれる。今、しばらく之を割つて解釋する。【四】兼味 種類多くして結構なる御馳走。【五】葛製 葛の類織で織つた衣といふので、その滑潤なのが特徴であらう。【六】神所憐 神様の御氣に入る。【七】慎勿出 注意して外出をするな。

【題義】 苦寒歌は、讀んで字の如く、どうやら窮士の爲に氣焰を吐いたものと思はれるが、何分、脱落があつて、意義が十分に疏通しない。

【詩意】 寒威の劇しきに苦み、黄昏の頃より、ひとり放歌し、感慨愴然、夜半に成つても、止めることが出来ない。もとより、陽春が無い譯でもなく、やがて節物歳月は循環して、その時に廻り逢ふから、さう寒さに苛けて閉口せずとも宜しい。氷食萬製は、食つても甘くはなく、唯だ清淨潔白を旨として神様の御氣には入るが、大賢にして、飢寒に苦むものに對しては、重裘兼味を以て賑恤するのが至當である。君にして、かういふ人を引き立てれば、もう何事を爲すとも善いので、意を填め、戸を塞いで、少しも外出せぬ様にし、やがて來年になれば、風ぬるく、景色暖かく、世は自然に春めて來て、君も亦た樂しく遊び暮らすことが出来る。何にしても、大賢を飢寒より救ひ出すといふことは、自他の兩爲になるので、どうか、この點に就いて、少しく考へて貰ひたい。

贈同遊者 已見正集

同遊者に贈る すでに正集に見ゆ

外集の初出本には、この題の詩があつたが、すでに、正集に出て居るから、刪つて仕舞つたといふので、即ち卷九、遊城南十六首の中の贈同遊者の一首であらう。

遺詩 十六首

韓昌黎集、即ち韓文の終に附載した遺文の一卷には、詩の前に聯句があるが、ここでは、顧注本に従つて、詩の方を前に置くことにする。

同資牟韋執中尋劉尊師不遇

資牟・韋執中と同じく劉尊師を尋ねたれども遇はず

秦客何年駐。仙源此地深。秦客、何の年にか駐まる、仙源、この地深し。  
還隨躡蹻騎。來訪馭風襟。還た躡蹻を躡むの騎に隨つて、來つて風を馭するの襟を訪ふ。  
院閉青霞入。松高老鶴尋。院閉ちて青霞入り、松高くして老鶴尋ぬ。  
猶疑隱形坐。敢起竊桃心。猶は形を隠して坐するかと疑ふ、敢て桃を竊むの心起す。

【字解】 一、秦客何年駐、この二句は、秦人が武陵桃源に世を避けたといふ故事を用ひたので、その詳は卷三桃源圖の條に見えて居る。二、躡蹻騎、後漢書王喬傳に「葉の令となる、入朝すること數ばなり。帝、太史をして候望せしむるに、言ふ、雙鳥あつて飛び來ると、乃ち羅を擧げて之を張り、但だ隻鳥を得たり。すなはち、尙書官屬に賜ふところの履なり」とある。これは、資牟、

贈同遊者 同資牟韋執中尋劉尊師不遇

韋執中の二人、ともに縣令なるが故に、縣令に關する故事を用ひたので、その泛用せずして、最も切實なるをば顯るべきである。  
【三】 馭風轡。莊子の逍遙遊に「列子の風に御して行く、杗杻として善きなり、旬有五日にして反ることある。雖は黠度、黠懷。【四】  
龜桃心。東方朔が桃を偷んだ事で、卷七讀東方朔雜事の條に見ゆ。

【題義】 題下の自注に「尋の字を得たり」とあり、蔣注に「この詩、五寶聯珠集に得たり、公、時に都官員外郎に任じ、洛陽の令贊牟。河南の令韋執中と同じく、以て之を訪ふ、元和五年なり。詩、同尋師を以て韻となし、人ごとに各一首、洪氏の年譜にも、亦た見えたり」とある。劉尊師は、いづれ高德の道士であらうが、その傳記等は分らない。

【詩意】 ここは、何年からか、秦人が亂を避けて駐まつて居る處の如く見え、殊に幽邃を極めて、宛然たる桃花源である。われは、雙兔を躡むといふ彼の王喬の如き二縣令に伴はれ、ここに來りて、風に御する列子の襟懷を備へたる劉尊師を尋ねた處が、生憎不在であつたのは、まことに遺憾である。と見れば、小院堅く閉ざしたれども、青霞は自然と流れ入り、松は高くして、老鶴が來り尋ね、物外の風光、まことに尊師の居たるにふさはしい。尊師は、不在だといふが、もしかすると、隱形の術を使つて、そこらに居るのかも知れないので、われは、桃を偷んだ東方朔の如き野心を起さずに、ひたすら謹んで居た。

【餘論】 蔣之翹の評に「この詩、退之の所作たること、確として證あるに似たり。但し、氣格、正集

の諸詩と絶だ相肖す、更に之を詳にするを俟つ」とあるが、後聯十字は、明鑿にして太た愛すべきを覺える。贊牟が同時の作は、陪韓院長、韋河南同尋劉師不遇と題し、題下の自注に以同尋師三字二分韻、牟得同字とあつて、その全篇は、左の如くである。

仙客誠難訪。吾人豈易同。獨遊應駐景。相顧且吟風。藥碗瓊枝秀。齋軒粉壁空。不題三五字。何以達壺公。

韋執中の作は、陪韓退之、贊貽周、同尋劉尊師不遇、得師字と題して、左の如く、そして、この人の作は、唯だ此一首が残つて居るだけである。

早尙逍遙境。常懷汗漫期。星郎同訪道。羽客杳何之。物外求仙侶。人間失我師。不知柯爛者。何處看圖碁。

以上は、全唐詩から檢出したのであつて、同書の略傳を見ると、贊牟には「牟、字は貽周、貞元進士の第に擧げられ、從事に歴佐し、後、留守判官檢校尚書都官郎中となり、出でて澤州刺史となり、國子司業に改められて卒す、集十卷あり、今詩二十一首を存す」とあり、韋執中には「執中は京兆の人、河南縣令泉州刺史を歴たり、詩一首」とある。そして、この二家の作に對照して見ると、韓愈の詩が其自作なることは、もとより疑なき様である。

春雪

片片驅鴻急，紛紛逐吹斜。

片片、鴻を驅つて急に、紛紛、吹を逐うて斜なり。

到江還作水，著樹漸成花。

江に到つて還た水と作り、樹に著いて漸く花と成る。

越喜飛排瘴，胡愁厚蓋砂。

越は喜ぶ、飛んで瘴を排するを、胡は愁ふ、厚うして沙を

兼雲封洞口，助月照天涯。

雲と洞口を封じ、月を助けて天涯を照らす。蓋ふを。

嗔見迷巢鳥，朝逢失轍車。

嗔には巢に迷ふの鳥を見、朝には轍を失ふの車に逢ふ。

呈豐盡相賀，寧止力耕家。

豐を呈して盡く相賀す、寧ろ止だ力耕の家のみならむや。

【字解】「一」驅鴻急、鴻が飛んで行く體で、勢が非常に急である。「二」逐吹、風を逐ふ。「三」排瘴、毒熱の氣を排除する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】春雪の降るや、片片として鴻が飛び行く様に早く、紛紛として風を逐うて斜に亂れて居る。

その江中に落ちたものは、溶けて水となり、樹に著けば、次第に花の如く見える。南なる越國では、

飛んで毒熱の氣を排除するを喜び、反對に北なる胡地では、厚く積んで平沙を蓋ふことを愁へて居

る。雲と一緒になつては、洞口を塞ぎ、月の光を助けては、天涯までも照らし、日暮には巢に迷ふ鳥

春雪

があるし、朝早くには、曳き棄てた車を認める。豊年の兆としては、誰でも慶賀せぬものなく、もとより力耕を以て活を爲す農家のみではない。

【餘論】蔣注に「以上、竝に方本載するところ、諸本無きところのもの、今悉く之を存す。諸本更に遺文一卷あり。方、ひとり贈族姪、嘲鼾睡三篇を取つて、餘は竝に録せず。今、竝に後に附見し、その疑ふべきものは、亦た但だ其目を存して其文を載せすと云ふ」とある。それから方崧卿は「この詩、文苑英華に得たり、その後、即ち正集中春雪の首句に云ふ、新年都未有芳華」と云ふものを以て之に系く、疑ふらくは、亦た公の作ならむ」といひ、蔣之翹は前の方は、之と全く同文で「之を系く」の下に於て「公の作に疑似すと云ふと雖も、その詞、特に淺俗不倫」といつて、全然方説に反對して、ひどく之を斥けて居る。この詩は、春雪と題するものから、矢張、普通の雪の詩で、特に春雪らしい氣分なきは、まことに遺憾で、蔣説も亦た一理あることと思ふ。

贈族姪

族姪に贈る

我年十八九，壯氣起胸中。

我年十八九，壯氣、胸中に起る。

作書獻雲闕，辭家逐秋蓬。

書を作つて雲闕に獻じ、家を辭して秋蓬を逐ふ。

歲時易遷次。身命多厄窮。

歲時、遷次し易く、身命、厄窮多し。

一名雖云就片祿不足充。

一名、云に就くと雖も、片祿、充つるに足らず。

今者復何事。卑棲寄徐戎。

今は復た何事ぞ、卑棲、徐戎に寄す。

蕭條費用盡。瀟落門巷空。

蕭條として、費用盡き、瀟落として門巷空し。

朝眠未能起。遠懷方鬱悵。

朝眠未だ起つ能はず、遠懷方に鬱悵たり。

擊門者誰子。問言乃吾宗。

門を擊つものは誰が子ぞ、問へば言ふ、乃ち吾が宗と。

自云有奇術。探妙知天工。

自ら云ふ、奇術あり、妙を探つて天工を知ると。

既往悵何及。將來喜還通。

既往は悵むとも何ぞ及ばむ、將來は還た通するを喜ぶ。

期吾語非佞。當爲佐時雍。

期す吾が語の佞に非ざるを、當に爲に時雍を佐くべし。

【字解】【一】無門。雲に雙ゆる御門、即ち皇居を指す。【二】秋蓬。蓬の穂が秋になると亂れて飛び散る。【三】一名。進士に登第せしこと。【四】片祿。少しばかりの俸祿。【五】卑棲。賤しき住居。【六】資用。物質。【七】瀟落。さびしき貌。【八】鬱悵。心もやもやとして心に不愉快なること。【九】非佞。佞は、媚び諛ふ。【一〇】時雍。時の清平。

【題義】贈族姪の上に、或は徐州の二字があるとのことで、すると、貞元十五年より十六年にかけて、

韓愈、徐州張建封の幕中に在りしとき、族姪の老成、即ち十二郎の來訪を受けて、これに贈つたのである。しかし、祭三十二郎一文には「又二年、吾、董丞相に汴州に佐たり、汝、來つて吾を省し、止まること一歲、歸つて其孳を取らむことを請ふ。明年、丞相薨じて、吾、汴州を去る、汝、來るを果さず。この年、吾、戎に徐州に佐たり。汝を取らしむるもの、はじめて行くとき、吾、又罷め去り、汝、又來るを果さず」とあつて、十二郎は、汴州には來たが、徐州に來なかつたので、詩中に言ふところは、他に確證がない。十二郎の兄に百川といふ人があつたが、これは早く死んだと見え、祭三十二郎一文に「吾、上に三兄あり、皆不幸にして早世、先人の後を承くるもの、孫に在つては惟だ汝、子に在つては惟だ吾」とある位で、外に族姪なるものは一人もない。すると、族姪は誰を指すか全く分からないことになる。又、自云有奇術、探妙知天工の句に因つて、韓湘だらうといふが、それならば、宜しく、族孫、もしくは姪孫といふべく、且つ韓愈が左遷された元和十四年に、湘は二十七歳であつたといふから、貞元十五年、徐州に居た時に、湘は七歳になる勘定、事態は、愈よ分からなくなる。しかし、この上、探究することも出來ぬから、この詩は、甚だ怪しいものだといふことに止めて、唯だ一通り解釋して置くことにする。

【詩意】われ年十八九、丁度、試験を受ける爲に、初めて長安に上京した時分は、壯氣、胸中に起り、功名手に唾して取るべしと思つて居た。そこで、上書して、九重に獻じたが、もとより、志を達せ

す、それから、家を辭して處處に飄流し、さながら、秋蓬を逐ふが如くであつた。顧みれば、歲月は遷り易く、身命は窮厄多く、折角進士に登第することは出来たが、わづかばかりの俸祿では、何の足しにもならない。刻下、何事をして居るかといへば、古しへの徐戎の地に來つて、賤しき住居を寄せ、身計蕭條として、物資すでに盡き、門巷には來訪する人もなく、まことに寂寥の極である。そこで、朝寢をして、なかなか起きず、さまざまの事を思ひ出し、心もやもやとして面白からず、ふさぎ切つて居る。その時、門を敲くものがあつて、誰ぞと問へば、わが同宗の族姪であつて、やがて迎へ入れて、いろいろ話をした揚句には、奇術を覚え込み、宇宙の玄妙なる道理を探つて、天工を究め知るといふことで、もし本當ならば、大したことである。汝の一身、既往の事は痛めども及ばず、さういふ事なら、將來は、どうやら此世を渡つて行くことも出来やう。願はくは、吾が語をして、一片の御世辭たるに止まらざらしめ、その奇術を以て、時の清平を助け、大に世の爲に成る様の一つ働いて貰ひたい。

【餘論】 妙を探つて天工を知るといふ觸れ出しは、まことに素張らしいが、これだけでは、如何なる奇術か分からず、従つて、それが果して時雍を助くべきや否や、まことに覺束ない。この詩は、半以上、自分の閱歷を述べて置いて、一轉して奇術になると、自分の事は、全くそつち退けに成り、ましまりが付かぬ處は、甚だ面白くないと思はれる。

嘲軒睡二一首

軒睡を嘲る 二首

澹師晝睡時、聲氣一何猥。  
頑颯吹肥脂、坑谷相鬼磊。  
雄哮乍咽絕、每發壯益倍。  
有如阿鼻尸、長喚忍衆罪。  
馬牛驚不食、百鬼聚相待。  
木枕十字裂、鏡面生痱瘡。  
鐵佛聞皺眉、石人戰搖腿。  
孰云天地仁、吾欲責眞宰。  
幽尋虱搜耳、猛作濤翻海。  
太陽不忍明、飛御皆情怠。  
乍如彭與黥、呼冤受菹醢。  
又如圈中虎、號瘡兼吼餒。

澹師晝睡る時、聲氣一に何ぞ猥なる。  
頑颯、肥脂を吹き、坑谷、相鬼磊たり。  
雄哮、乍ち咽絶、發する毎に壯にして益す倍す。  
阿鼻尸の如きあり、長く喚んで衆罪を忍ぶ。  
馬牛驚いて食はず、百鬼聚まつて相待つ。  
木枕十字裂け、鏡面に痱瘡を生ず。  
鐵佛、聞いて眉を皺め、石人、戦いて腿を搖かす。  
孰か云ふ、天地仁なりと、吾、眞宰を責めむと欲す。  
幽尋、虱、耳を搜り、猛作、濤、海に翻る。  
太陽明かなるに忍びず、飛御皆情怠す。  
乍ち彭と黥と、冤を呼んで菹醢を受くるが如し。  
又圈中の虎、瘡に號び兼ねて餓に吼ゆるが如し。

雖令伶倫吹苦韻難可改。伶倫をして吹かしむと雖も、苦韻、改むべき難し。  
 雖令巫咸招魂爽難復在。巫咸をして招かしむと雖も、魂爽れて復た在り難し。  
 何山有靈藥。療此願與採。何の山にか靈藥ある、此を療せば、願はくは與に採らむ。

【字解】(一) 地師 坊さんの名で、前に送、諸葛亮往三顧州、讀書の五古の條に見えた通り、覺が坊さんであつた時の法名であらう。(二) 一何韻 韻は風りがまじきこと、その聲音の風雅なることを云ふ。(三) 頑風 強く吹く旋風。(四) 肥脂 脂肪に富んで肥え太つた野獸。(五) 鬼窟 崔嵬磊落、その四邊の巖石のかどかどしきないふ。(六) 阿鼻尸 阿鼻地獄、謂はゆる八大地獄の一。(七) 瘡痂 瘡に「腫病なり」とある。(八) 搖風 皮の肉が自然に震ふ。(九) 眞宰 造物主。(一〇) 幽尋 幽なる處に尋ね入る。(一一) 猛作 勢たけく暴れ廻る。(一二) 飛御 空を飛び風に御する、飛禽の類。(一三) 彭越 彭越と肆布。(一四) 羶 骨や肉を鹽漬にする。高祖の晩年、彭越肆布、相繼いで叛を謀つて皆殺されて仕舞ひ、中にも、彭越は、その肉を醃にされた。その評は、各史記の本傳に見ゆ。(一五) 吼殺 吼殺の爲に吼える。(一六) 伶倫 蘇注に「黃帝、伶倫をして嶠谷の竹を取り、兩節の間を斷つて之を吹かしめ、以て黃鍾の宮と爲す」とある。(一七) 巫咸 楚辭の招魂に、帝昏巫咸曰、有人在、下、我欲輔之、魂離散、汝筮與之、とある。(一八) 魂爽 爽は破れる。(一九) 靈藥 仙藥。

【題義】この詩は、澹師といふ坊さんが、睡る時に鼾をかく癖があるので、それを嘲つて作つたのである。

【詩意】澹師が晝寝をする時、その寢息は如何にも亂雑で、えらい音を爲すのが常である。たとへば、力強い旋風が崔嵬磊落たる坑谷の間に吹き入るとき、肥え太つた野獸が、一齊に哮り立て、やがて咽

び絶ゆるが如く、しばらくすると、又聲を發し、發する度ごとに、勢の壯なることは、前に倍する様である。又たとへば、阿鼻地獄に落ちた者が、大叫喚を發して、衆罪を忍び、なかなか呵責を止められず、はては、血肉ともに潰散し、馬牛も驚いて食はうともせず、唯だ百鬼が聚まつて食つても宜しいといふ許しの出るのを待つて居るやうである。その鼾の聲は、愈よ劇しく、はては、木枕も十字に裂けて仕舞ひ、折角磨き立てた青銅の鏡の面も、腫れ上り、これを聞かば、鐵佛も眉を皺むべく、石人も戰慄して股の肉を震はすかと疑はれる。天は覆ひ、地は載せ、ともに、至仁の物と聞いて居るのに、睡中に、かくの如き鼾聲を出すのは、よもや唯だ事ではあるまじく、何か天地に不仁の所行があるから、自然うなされて、覺えず鼾聲を發するのに相違ないから、吾は、是非造物者を責め正さうと思ふ。天地の不仁なるに當つて、幽處を尋ねては、氣に耳を搜らせ、勢すさまじく荒れ立ちては、大海が海を翻し、はては太陽も、自分ひとり明かなるに忍びずして、暗くなり、従つて、空中を飛ぶ禽鳥の類も、情り忘れて仕舞ふ。かくて、不仁の毒氣に中てられるから、鼾聲となつて鳴り出すので、忽ちにして、彭越・肆布の輩が菹醢の極刑を受くるに臨み、ひたすら其冤を呼ぶが如く、又檻の中に囚へられた虎が、瘡の痛さに叫び、飢に迫れる爲に吼ゆるが如く、たとひ、伶倫をして笛を吹かしめた處で、その苦しい響は、到底別に寫し取ることとは出来ないし、巫咸をして招かしめむとするも、その靈魂は、すでに敗れて、亦た取りまとめることが出来ない。かういふ風に、鼾をかく者の精神は、天地の不仁

に攻められて、殆んど死んだも同じであるから、どこの山にか仙薬が有るならば、願はくは、それを探つて来て、この病を治療して遣りたいものである。

【餘論】初めは、唯だ其叫喚の甚しいのを述べたが、後には、一步を進めて、これを天地の不仁に歸し、韻苦に、魂爽れ、到底これを救ふに由なきことを傷んだのである。

澹公坐臥時、長睡無不穩。  
澹帥、坐臥するの時、長睡、穩ならざるなし。

吾嘗聞其聲、深慮五藏損。  
吾、かつて其聲を聞くに、深慮、五藏損す。

黃河弄瀆瀑、梗澀連拙鉞。  
黃河、瀆瀑を弄し、梗澀、拙鉞を連ぬ。

南帝初奮槌、鑿竅洩混沌。  
南帝、初めて槌を奮ひ、竅を鑿つて、混沌を洩らす。

迴然忽長引、萬丈不可付。  
迴然として忽ち長く引き、萬丈、付るべからず。

謂言絕於斯、繼出方袞袞。  
言ここに絶ゆと謂へば、繼いで出でて方に袞袞たり。

幽幽寸喉中、草木森莽蒼。  
幽幽たり寸喉の中、草木森として莽蒼。

盜賊雖狡獪、亡魂敢窺閫。  
盜賊は狡獪と雖も、亡魂敢て閫を窺はむや。

鴻蒙總合雜、詭譎駢戾狠。  
鴻蒙、すべて合雜、詭譎、戾狠を駢す。

乍如鬪呶呶、忽若怨懇懇。  
乍ち鬪つて呶呶たるが如く、忽ち怨んで懇懇たるが若し。

賦形苦不同、無路尋根本。  
形を賦する、苦だ同じからず、根本を尋ぬるに路なし。

何能埋其源、惟有土一畚。  
何ぞ能く其源を埋がじ、惟だ土一畚あるのみ。

【字解】【一】坐臥、坐つた儘、體を伏せる。【二】五藏、肺・胃・心・脾・腎。【三】瀆瀑、瀆ぎ下る勢の劇しきなれ。【四】鉞、洪水が一つ處に塞がれて居て疏通せぬこと。【五】連拙鉞、鉞は鉞、即ち堯の臣、禹の父、洪水を治めたが、何の教もなかつた。拙劣なる鉞の如きものが幾人打續いて治水を爲すも、唯だ連拙するのみといふ意。帝堯に「顓頊、五世にして鉞を生む、堯、これをなして洪水を治めしむ。功なし。羽山に殛す」とある。【六】南帝初奮槌、莊子の應帝王に「南海の帝鯀、北海の帝魍、中央の帝暭、相與に其だ善し。鯀と魍と、混沌の體に報いむことを謀る。曰く、人皆七竅あり、以て視聽食息す、これ獨り有るなし、嘗試に之を鑿たむと。日に一竅を鑿ち、七日にして混沌死す」とある。【七】袞袞、引き續く貌。【八】莽蒼、草木の叢生する貌。【九】閫、門限、しきり。【一〇】鴻蒙、宇宙の元氣。【一一】戾狠、勝手に意地悪きこと。【一二】呶呶、口やかましく罵り合ふ。【一三】懇懇、懇みがかましく、くどくどと述べ立てる。【一四】土一畚、將注に「畚は土を盛る器、畚索を以て之を爲る、管の屬なり、左傳に、諸を畚に置く」とある。即ちもつこの類。

【詩意】澹師が坐わつた儘、伏し倒れると、ゆつくりと睡りに入つて、さも安穩らしく見えるが、吾、かつて、その駢聲の劇しきを聞き、これは餘り色色の事を深く考へ込んだ爲に、五藏を損じたのであると断定した。五藏を損じたとすれば、その療治は、なかなか六つかしく、うツかりすると、黃河の



水、方に漲り、瀧津瀬の勢を爲して下る時に當り、鯨の如きものが、幾人打續いて出た處で、治水には何の效もなく、却つて、洪水を梗澁せしめるばかり。又南海の帝儲が、徳に報ゆる爲に、日ごとに一窟を鑿ち、七日にして混沌が死んだといふ様に、折角の苦心も、無になつて、反對の結果を生ずる様なこともあつて、五藏の治療は、殆んど望が無い位。そこで、濼師の軒をかく状態を篇と觀察すると、迥然として息を吸ひ入れ、萬丈にも及ぶかと思はれ、到底測るべからざる位。やがて、聲音が此に絶えたかと思ふと、繼いで吐き出す息は、衰衰として絶えず、寸餘ばかりの狭い咽喉の處には、草木が森として茂つて居るが如く、何だか大さうな物が悶えて居て、これで軒をかくものと推察された。盜賊は、狡猾な者で、どんな處へでも、そつと這入つて行くが、亡魂は、その作用に制限があつて、限界を越えて働くことは出来ず、宇宙の元氣は、すべての物を混同拉雜し、その變化の工合は、詭譎にして、時には、意地悪くひねくれた様な事をするので、五藏の損じたのは、いつまでも直らず、忽ち喧嘩をして、口ぎたなく罵るが如く、忽ち怒みがましくどくどく訴ふるが如く、軒聲は愈々盛になる。本來人の形を賦する、各異なつて居て、病の根本を尋ねる路もないが、どうか、春に一ぱいの土を以て其源を堰ぐが如く、五藏の損じて居るのを根治して、軒をも止めさせたいものである。

【餘論】前首は、軒をかく原因として、天地の不仁を擧げたが、今度は、一層現實的に、五藏の損じたことに及び、その状態を述べ、どうか治療をして遣りたいといつたのである。大體の構想は、面白

くないでもないが、詩趣稍や闕如した様な感がある。それを掩飾する爲に、仰仰しき形容を爲し、一寸人目を驚かすが、再讀三讀、却つて、その淺近を覺えることを免れない。なほ、この兩首に就いて、洪興祖は「李希聲の家に退之の遺詩數十篇あり、希聲云ふ、皆非なり、ひとり朝軒の二篇、稍や似たり、末に録す」といひ、周紫芝の竹坡詩話には「世傳ふるところ退之の遺文、その中、嘲三軒睡の二詩を載す、語極めて怪譎。退之、平日未だ嘗て佛家の語を用ひて詩を作らず。今、有如阿毘戸、長喚忍三衆罪」と云ふ、その退之の作に非ざること決せり。鐵佛開皺眉、石人取搖腿の句の如き、太だ鄙陋に似たり。退之、何ぞ當に是語を作すべき。小兒輩、眞を亂ること、此の如きもの、正に衆し。鳥んぞ辨せざるべけむや」といひ、ともに之を指斥して居るが、ひとり何孟春は「退之の嘲三軒睡の二詩、周少隱の語に、その怪譎、意義なし、退之の作に非ずといふ。春以爲へらく、然らず、これ張籍の謂はゆる駸雜の詞なり。退之、特に用つて戲となすのみ」といつて、大に之を辯護して居る。但し、これを韓愈の作としても、決して、上乘の物に非ざることとは、もとより云ふまでもない。

晝月

晝月

玉盃不磨著泥土。玉盃磨かす、泥土を著け、

【字解】

〔一〕玉盃 玉で造つた

青天孔出白石補 青天孔出でて白石補ふ。

兔入白藏蛙縮肚 兔は白に入つて藏し、蛙は肚を縮む、

桂樹枯株女閉戸 桂樹、株を枯らして、女、戸を閉づ。

陰爲陽羞固自古 陰、陽の爲に羞づるは、固より古よりす。

嗟汝下民或敢侮 嗟、汝下民、敢て侮るあらむや。

戲嘲盜視汝目瞽 戲嘲盜視せば、汝の目瞽せむ。

閉戸 嫦娥が月中に走つて其處に留まつて居る。以上、曾卷五教三玉川詩月蝕詩の注に見ゆ。

【題義】 説明に及ばぬが、一寸珍らしい題である。

【詩意】 月の晝の空にはの白く懸れるを見ると、丁度、玉の盆が磨かれず、泥土を著けて汚れて居る様であるし、青天に孔が出来て、仕方がないから、白石を以て繕つた様に見える。無論、晝の事で、光も薄いから、月中の模様も、はつきりとは見えぬ、藥を搗いて居る兔も、白の中に這入つて隠れて仕舞ひ、蝦蟇も亦た腹を縮めて小さくなり、例の桂樹も、幹が枯れて勢衰へ、そして嫦娥も、戸を閉ぢて引ッ込んだといふ様な安排である。今しも晝で、太陽が高く中天に沖して居る。そこで、陰精た

盆、南史の沈炯傳に「茂陵の玉盤。遂に人間に出づ」とある。【三】白石補 列子に「天地亦た物足らざるあり、故に昔者女媧氏、五色の石を選び、以て闕を補ふ」とある。【四】項 月中に兔が居て藥を搗く。【五】蛙縮肚 月は蝦蟇の精、ここでは蛙が腹を縮めるといふ意。【六】桂樹 月中に大きな桂樹がある。【七】女

る月が太陽に壓倒せられて、小さく薄く、さながら羞づるが如き態度を爲して居るので、さういふ事は、むかしから、毎毎見るところである。しかし、月は、もとより神聖なもので、やがて夜になれば、再び蘇つて、清光を放ち、天地を我が物顔に支配するに相違ないから、汝下民ども、晝の月を見て、これを侮るやうなことがあつては成らぬ。かりそめにも戲嘲して、そつと盗み視たならば、いつしか、罰が當つて、汝の目は潰れて仕舞はうぞ。

【餘論】 多少の諷意あるものとして見られるが、何分にも、淺薄の謂を免れぬもので、蔣之翘が「鄙俚にして幾んど句を成さず、その僞撰するもの、尙ほ月蝕の詩意を剽竊して之を爲せるならむ」といつたのは、如何にも尤もと頷かれる。

贈張徐州莫辭酒 張徐州に贈る、酒を辭する莫れ

莫辭酒 酒を辭する莫れ、

此會固難同 此の會、もとより同じうし難し。

請看工女機上帛 請ふ看よ、工女機上の帛、

半作軍人旗上紅 半ば軍人旗上の紅となる。

贈張徐州莫辭酒

【字解】 【一】 難同 同席するこ  
とが六つかしい。  
【二】 機上帛 機の上で織りかけて  
居る絹地。

莫辭酒。

酒を辭する莫れ、

誰爲君王之爪牙。

誰か君王の爪牙となる。

春雷三月不作響。

春雷、三月、響を作さず、

戰士豈得來還家。

戰士、豈に來つて家に歸るを得むや。

【題義】張徐州は即ち節度使として徐州に居る張建封。莫辭酒は、起首の三字を取つたのである。

【詩意】酒を辭する勿れ、かかる會合には滅多に同席することが出来ぬから、今夕だけは、十分に痛飲しやうではないか。試に見られよ、工女が機の上で今しも織りかけて居る絹地は、やがて赤く染められて、軍旗となるので、何時戦争が始まるとも知れぬ。酒を辭する勿れ、天下、騷亂に苦む折から、誰が君王の爪牙となつて、撥亂反正の功を爲すべきぞ。是非とも、さういふ人が出て來なくては成らぬ。三月には、春雷が轟いて、今まで蟄伏して居たものが一齊に勢を盛り返す時であるが、もし雷が響かなければ、折角征伐に出かけた戰士も、凱歌を擧げて家に還ることが出来ない。今しも、丁度その時であるから、討賊の事に專にして、早く清平の世に復する様に致したく、それで、元氣を付ける爲に、この酒を十分に飲んで貰ひたい。

【餘論】蔣之翘の評に「當時、四方警多く、朝廷、賊を討つ意なし、而して、諸將、亦た命を用ひず、故に退之、春雷の二語、意諷するところあるが若きなり」とあつて、いかさま、この一首は、韓意の手筆だらうと思はれる。

辭唱歌

唱歌を辭す

抑逼教唱歌。不解看豔詞。

抑逼して唱歌せしむ、豔詞を看るを解せず。

坐中把酒人。豈有歡樂姿。

坐中、酒を把るの人、豈に歡樂の姿あらむや。

幸有伶者婦。腰身如柳枝。

幸に伶者の婦あり、腰身は柳枝の如し。

但令送君酒。如醉如愁癡。

但だ君に酒を送らしむ、醉ふが如く、愁癡の如し。

聲自肉中出。使人能透隨。

聲は肉中より出で、人をして能く透隨せしむ。

復遣慳悵者。贈金不皺眉。

復た慳悵の者をして、金を贈つて眉を皺めざらしむ。

豈有長直夫。喉中聲雌雄。

豈に長直の夫、喉中聲雌雄たるあらむや。

君心豈無恥。君豈是女兒。

君が心、豈に恥なからむや、君、豈に是れ女兒ならむや。

君教發直言。大聲無休時。

君、直言を發せしむ、大聲、休む時なし。

君教哭古恨不肯復吞悲。君、古恨を哭せしむれば、肯て復た悲を吞まず。  
乍可阻君意豔歌難可爲。乍ち君が意を阻つべし、豔歌は爲すべき難し。

【字解】【一】抑遏、無理に強ひる。【二】伶者、伶人の婦といふのではなく、伶者たる婦、即ち歌妓の意であらう。【三】慙、なまめかしき貌。【四】蹙眉、心が自然に其後に隨ふ、つまり感心すること。【五】慙慙、二字ともに情む。吝嗇。【六】長直、夫、身の丈高き偏強なる大丈夫。【七】離堆、細い聲と太い聲とを使ひ分ける。【八】可阻君意、お氣に障つても仕方がない。

【題義】酒宴の席上、何か一つ歌へといはれた時、これを辭する爲に作つたのである。

【詩意】席上、酒の稍や巡りし頃、この無骨者を無理に強ひて、何か歌つて見よとの仰せであるが、平生豔詞を看るを解せざるを以て、歌などは一向知らぬから、歌ひやうもない。それでは、誰かに代つて遣つて貰はうと思つても、坐中酒を把る人は、まだ十分に酔はず、相變らず鹿爪らしく構へて居て、歡樂の姿を爲すものが無いから、これも仕方がない。すると、幸にも、座を取り持つ歌妓があつて、その袅娜なる腰は、柳の枝の如く、君に酒を送らしむれば、その態度の媚かしき、すでに酔へるが如く、慙慙なるが如く、まことに、しほらしくて風情があるが、その女が、それでは私が一つ始めますと云つて歌ひ出した。その聲は、喉の肉の間より湧き出で、人をして感心せしむるばかり、それのみか、平生吝嗇を以て聞こえたる者をして、眉を皺めずに金を贈らしめ、まことに、御座なりの上手なこと、この上なしで、どうやら、この無骨者が歌はずに済んだのは、まことに喜ばしい。われは、

身の丈高き一廉の大丈夫であつて、喉の中で細い聲と太い聲を使ひ分けることなどは出来ない。かく申す某を歌妓視する君は、まさか心に恥なきことはあるまい、君は、まさか女ではあるまい。もし君が我に命じて、直言を發せしめたならば、おもふ存分、言つて退け、大聲を發して休む時も無いであらう。もし君が我に命じて、昔の恨事を哭せしめたならば、敢て悲を吞まず、心ゆくばかり慟哭して、お目にかける。ひよつと御氣に障るかも知れぬが、豔歌だけは、私に出来ないから仕方がない。【餘論】蔣注に「この歌、諸本、皆、恐らくは退之の作るところに非すと注す。朱子、乃ち姑らく之を存す、豈に或は辭に賞するところあらむ」とある。大體に於ては、極めて巧者に、極めて氣概ある様に言ひ終せてあるが、格を取ること高からず、措辭も亦た十分に洗練せず、聊か取るべきものは有るとしても、韓愈の手筆としては、聊か首を傾かしめる。

知音者誠希

音を知るものは誠に希なり

知音者誠希、念子不能別。音を知るものは誠に希なり、子を念うて別るる能はず。  
行行天未曉、攜手踏明月。行行、天、未だ曉ならず、手を攜へて明月を踏む。

【字解】【一】知音、おのれの心を善く知れる人。列子の協間に「伯牙善く琴を鼓す、鍾子期善く聽く。伯牙琴を鼓するに、志、

高山に在り、鍾子期曰く、善いかな、峽峽として泰山の若しと。志、流水に在り、鍾子期曰く、善いかな、洋洋として江河の若しと。伯牙の念ふところは、鍾子期必ず之を得」とあり、呂氏春秋に「鍾子期死す、伯牙琴を破り、絃を絶ち、終身復た琴を鼓せず、以爲へらく、世に知音なし」とある。それから揚雄の解嘲に「師曠の鐘を調する、知音の者の後に在るを映てばなり」とある、文選の古詩に不慙歌者苦、但傷知音希」とある。

【題義】この詩は、起首の一句を取つて題に代へたので、實は送別の詩である。

【詩意】世に知音の者は、まことに希であつて、君の如く我が心の底まで知り抜いて居る人は、他に全く無いから、君を念うて、ここに別を爲すことが出来ない。そこで、まだ夜あけには成らぬ頃、君の早行を送らむとし、手を攜へて明月の光を踏みつつ、行き行きて止まるところを知らぬ程である。

【餘論】二十字、一氣呵成、色あり、情あり、まさしく神品を以て稱すべきものと思ふ。

酬藍田崔丞立之詠雪見寄

藍田の崔丞立之の雪を詠じて寄せらるるに酬ゆ

京城數尺雪、寒氣倍常年。京城數尺の雪、寒氣、常年に倍す。

泯泯都無地、茫茫豈是天。泯泯として、都て地なく、茫茫として豈に是れ天ならむ。

崩奔驚亂射、揮霍訝相纏。崩奔して、亂射するに驚き、揮霍して、相纏ふかと訝る。

不覺侵堂陛、方應折屋椽。不覺す堂陛を侵すを、方に屋椽を折るなるべし。

出門愁落道、上馬恐平鞦。門を出でては道に落つるを愁へ、馬に上つては鞦に平か。

朝鼓矜凌起、山齋醕酌眠。朝鼓矜凌として起ち、山齋醕酌して眠る。ならむを恐る。

吾方嗟此役、君乃詠其妍。吾、方に此役を嗟し、君、乃ち其妍を詠す。

氷玉清顏隔、波濤盛句傳。氷玉、清顏隔たり、波濤、盛句傳ふ。「せむことを憶ふ。

朝飧思共飯、夜宿憶同氈。朝飧には飯を共にせむことを思ひ、夜宿には氈を同じう。

舉目無非白、雄文乃獨玄。目を舉ぐれば、白に非ざるはなし、雄の文、乃ち獨り玄。

【字解】【一】京城、長安城中。【二】泯泯、埋もれる貌。【三】茫茫、邊際なき貌。【四】揮霍、振つて飛びかかる。【五】堂、陸家の階段。【六】屋椽、屋脊のたるき。【七】平鞦、下鞍と平均する。【八】矜凌、瘦て我慢をする。【九】此役、公務の爲に出動する。【一〇】氷玉清顏隔、この二句は崔立之の詩句から轉じて出たものに相違なく、氷玉に感じては、君の清顏見るに由なきを嘆じ、波濤に就いては、君の名句を感吟するといふ意。【一一】雄文乃獨玄、漢の揚雄が易に擬して太玄經を作り、時人、玄の尙ほ白きを笑つたから、解嘲の一文を草したといふことがあつて、ここでは、それを反用したのである。

【題義】崔立之は、前にも數ば見えて居たが、元和十年頃には、藍田縣丞であつた。この詩は、立之が雪を詠するの作を寄せたから、それに酬いて作つたので、本集に在つた雪後これに寄せたのと同じ

頃だらうと思ふ。

【詩意】長安城中では、數尺の雪が降り積り、寒氣は、例年に倍して、甚だ嚴しい。雪に埋れては、浪浪として地らしいものも見えず、しかし、茫茫一白、これは、天ではない。その雪が崩れ奔るときは、亂射の勢、すさまじきこと、驚くべきばかり、振りかかつて飛びつく様は、さながら付き纏ふかと訝る程である。その内に、いつしか、家の階を侵す位にもなり、やがて、屋根棟のたる木を折つて仕舞ふのであらう。門を出ては、雪のひらひらと道路に落ちるのが苦になるし、馬に乗ると、下鞍と平均する程も高く積ることを恐れる。それから、朝の街鼓を聞き、瘦せ我慢をして起きては見たものの、どうも寒くて堪まらぬ處から、小齋の内で、酒に酔つて睡るより外、手段はない。しかし、自分は役所務めがあるから、勝手に休むことも出来ず、君は乃ち雪の妍なる様を賦詠されたのは、餘程のん氣である。その氷玉の詠を見ては、清顔遠く相隔れるを嘆じ、波濤の吟を誦しては、名句の世に傳はるを羨ましく思ふ。出来得べくんば、平時ともに起臥し、朝夕膳に向ふ時は、飯を共にし、寝ぬる時は、氈を同じうしたいと思ふ。ここに目を擧ぐれば、乾坤白からざる處なく、ひとり、われのみは、古しへの揚雄と同じく、太玄の名にしおふ通り玄く、即ち世俗と趨舍を異にして居る。

【餘論】五言排律として、對仗には多少の心を用ひたものと見えるが、刻劃洗鍊、未だ足らず、本集中、同題の諸作に數等を輸することを免れない。蔣注に「正集七卷、すでに雪後寄崔二十六丞公あり、然れども、この作淺鄙、殊に其言に類せず、一結に至つては、又大に釋氣に近し」と云つて居るが、いかにも尤も千萬である。

潭州泊船呈諸公

潭州にて船に泊し、諸公に呈す

夜寒眠半覺、鼓笛鬧嘈嘈。夜、寒くして、眠、半ば覺む、鼓笛鬧しくして嘈嘈。  
閣浪春樓堞、驚風破竹篙。閣浪、樓堞に春き、驚風、竹篙を破る。  
主人看使範、客子讀離騷。主人、使範を看、客子、離騷を讀む。  
聞道松醪賤、何須恡錯刀。聞くならく、松醪賤しと、何ぞ錯刀を恡むを須む。

【字解】(一) 嘈嘈、騒がしき貌。(二) 樓堞、城樓の牆、即ち女牆。(三) 竹篙、つき立てて舟を繋いである棹。(四) 主人、來訪者の中の重なる人を指す、大方その地の刺史であらう。(五) 使範、蔣注に「未だ詳かならず、或は云ふ、羅ふらくは亦た書名、聘遊記、遣使錄の類の如くならむ。然らずんば、主人、客の模範を仰ぐを謂ふならむ」とある。これを書名としたのは、下の離騷に對して云つたのであらうが、何等の據り處もない。そこで、しばらく、後説に従ひ、師表となすに足るべき風範といふことにし、且つ之を主人に屬せしめやうと思ふ。つまり、主人に對して敬意を表したものとするのである。(六) 離騷、言ふまでもなく、屈原の作。潭州は即ち湘州で、屈原が水に投じて死んだ處であるから、特に之を擧げたので、決して唐突ではない。(七) 松醪、松の花を和へて釀造した酒、杜甫の詩に松醪酒勢芳、醉とある。(八) 錯刀、金錯刀の略。古しへの貨幣、仍つて錢の鑄に用ふ。韻會に「王莽、契刀を造る。その環、大錢の如く、身形、刀の如し。文に曰く、契刀五百と。錯刀は黄金を以て錯す、その文に曰く、一刀直五千」とある。

【題義】唐書地理志に「潭州長沙郡、江南西道に屬す」とあり、元和郡國志に「隋、陳を平らげ、湘州を改めて潭州といひ、昭潭を取つて名と爲す」とある。すると、この詩は、永貞元年の春、陽山を離れて郴州に遷る時の旅中の作であらう。

【詩意】春なほ淺く、殊に水邊は夜寒くして、折角眠つたが、やがて半ば覺めかかつた。すると、岸上には鼓笛の響嘈嘈として鬧がしく、まさしく大官の御來駕と察せられる。時しも、暗き浪は、城樓の女牆に春き、けたたましき風は、舟を繋いである竹棹を折りさうである。やがて、諸公が御出でになつたが、主人たる刺史は、流石に師表とすべき風範を備へて、打ち見るからに、慕はしき人物である。われは、從來放逐の客子である處から、離騷を誦して、感慨に堪へられない。聞けば、この地では、松花で釀した酒が名物で、價も廉いさうだから、錢を吝まず、しこたま買ひ入れて、諸公と今夕痛飲をしやうではないか。

【餘論】この詩も五律の定格を備へて居る。第一句より前聯を、第二句より後聯を各引き出し、そして、七八兩句は、更に一步を拓開して居る。前に掲げた本文は、官版の韓文に據つたのであるが、蔣注本では、前聯が閑浪春樓堞、驚風破竹篙となつて居る。春と春とは、字形が肖て居る處から、いつしか、かくの如く誤つたのに相違なく、春の字、破の字、ともに謂はゆる字眼である處が面白いので、もし春樓の堞、破竹の篙とすると、殆んど無意味の者に成るやうに思はれる。

飲城南道邊古墓上逢中丞過贈禮部衛員外少室張道士

城南道邊の古墓上に飲し、中丞が贈禮部衛員外少室の張道士を過ぐるに逢ふ

偶上城南土骨堆、偶ま上る城南土骨の堆、

共傾春酒三五杯、共に春酒を傾く三五杯、

爲逢桃樹相料理、桃樹に逢ふが爲に相料理す、

不覺中丞喝道來、覺えず中丞喝道の來るを。

すると周旋といふ様な意味である。【三】喝道、下に居よ、下に居よ、といつて、先拂ひをして大官の通ること。

【題義】自注に「中丞は裴度を謂ふなり」とある。裴度が御史中丞となつたのは元和九年頃で、その時、韓愈は考功郎中知制誥であつた。少室は嵩山の一峰。張道士は其處に住んで居たのであるが、生きて居る人に贈禮部衛員外といふのも變てこで、これは、韓愈が後年補書したか、或は編輯者が付

け加へたのであらう。裴度は、何の爲に態度張道士を尋ねたか、もしかすると、度は元と河東の人であるから、所用の爲に歸省でもして、その序に、張道士を尋ねたのであらうか。いづれにしても、詩意には關係がない。この張道士は、後に送張道士の詩の序に「嵩高の隱者」とあるから、大方その人であらうと思はれるが、なほ其詩の條に於て述べることにする。この詩は、韓愈が例の城南に遊び、處

【字解】【一】土骨堆、黄土と白骨とが雜つて堆くなつて居る處。

【二】料理、晉書王徽之傳に「桓冲謂つて曰く、卿、府に在るもの日久し、比る當に相料理すべし」とあり、杜市の詩に未須料理白頭人」とある。

處遊覽の末、道の邊なる古墓の上で、瓢酒を開いて飲んで居ると、偶ま裴度が少室の張道士に逢つて來た歸りだといつて、そこを通りかかつたから、即坐に賦して示したのである。

【詩意】 偶ま城南に行くと、黄土と白骨とまざつて堆くなつて居る處があつて、休息するに善いから、そこに坐を占め、瓢酒を取り出し、同行の者と一緒に四五杯を傾けて居た。それは桃の花が咲き出でて、あたりの景色面白く、仍つて相周旋して時を移したからであつて、中丞が威儀堂堂、喝道の聲いかめしく、ここを通過されることも、つい知らずに居た。

【餘論】 この詩は、平淺にして他の奇なく、取り出でて彼此云ふ程の者でもない。又たとひ桃樹に逢うて相周旋した爲めとはいへ、墓地に坐わり込んで酒を飲むといふのも、聊か奇怪である。

池上絮

池上の絮

池上無風有落暉。

池上風なくして落暉あり、

楊花暗後自飛飛。

楊花は暗くして後自ら飛飛たり。

爲將纖質凌清鏡。

纖質を將て清鏡を凌ぐが爲に、

濕却無窮不得歸。

濕却窮まりなくして歸るを得ず。

【字解】 一 落暉 落日に同じ、夕日、入日。二 暗後 天が暗くなつてから。三 纖質 楊花の質の軟弱なるをいふ。四 清鏡 池面の澄んで鏡の如きをいふ。

【題義】 絮は河柳の花で、支那では、春の末、亂れ飛ぶこと雪の如く、外では決して見られない。この詩は、池邊の柳絮を詠じたのである。

【詩意】 池の邊に、折しも風なくして、夕日が落ちかかき、やがて空が暗くなると、柳の花が、自然に、ひらひら飛び出した。但し、もとより軟弱の質でありながら、鏡とまが水面を凌いで飛ぶのであるから、見る間に水に落ちて溼ひ、その儘、飛べなくなつて仕舞つた。

【餘論】 不得歸の歸は、軽く見て、矢張飛ぶといふことにせねば、意味が透徹しない。つまり、漢の武帝の秋風辭に草木黃落兮雁南歸とある、その歸と同じ様である。大體の旨意は、楊花が水に落ちて飛べなくなつたといふに過ぎぬが、その曲折紆餘の間に多少の趣があるのである。

聯句

ここに聯句が三首があるが、方崧卿の説に據ると、孟東野の集から抜いて附載したといふことで、斷じて偽作ではない。

有所思聯句

思ふ所あり、聯句

相思繞我心。日夕千萬重。

相思、我が心を繞り、日夕千萬重。



年光坐婉晚。春淚銷顏容。郊年光、婉晚に坐し、春淚、顏容を銷す。

臺鏡晦舊暉。庭草滋新茸。臺鏡、舊暉暗く、庭草、新茸滋し。

望天山。上石。別劍水中龍。愈天山の上の石を望み、劍水中の龍に別る。

【字解】「一」千重。千重萬重に重れる。「二」年光。過ぎ行く歲月。「三」婉晚。盛りを過ぐること。「四」銷。銷滅。銷滅する。色容が衰へる。「五」臺鏡。即ち鏡臺。「六」舊暉。もとの光輝。「七」新茸。新らしき茂み。「八」天山。後漢書班超傳の注に「西域に天山あり、冬夏雪あり、匈奴、これを天山といひ、これを過ぐれば皆馬を下つて拜す」とある。「九」劍水中龍。卷二、利劍の條にも見えて居たが、晉書張華傳に「雷煥、蜀城の雙劍を得、一を以て華に與へ、一を以て自ら佩ぶ。華誅せられ、劍の在るところを失ふ。煥卒す、その子、持して延平津を過ぐ、忽ち腹間に於て躍り出でて、水に墮つ、兩龍の鬘鬘するを見る、ここに於て、劍を失ふ」とある。

【題義】有所所思といふ題は、主として美人を思ふ情を敘したのであるが、謂はゆる美人は、詩經や楚辭に見ゆると同じく、その君、もしくは友を指すことが普通で、ここのは後者である。

【詩意】相思の一念、わが心を繞り、日夕愈々増して、千重萬重に及び、到底、これを消遣することが出来ない。今しも、一年中の最も好い時節たる春も暮れかかり、そして、絶えず泣いてばかり居る爲に、顔色が衰へて來た。鏡臺に向つて妝を理むることも稀であるから、もとは明皎皎として居たのが、今はほの暗くなり、庭の草は、夏に入つて、新に茂つて來た。ここに至りて、悵悵自ら勝へず、たとへば天山の上の石を望むが如く、劍が化したといふ水中の龍に別るるが如く、再び逢ふ由なきを嘆き詫ぶるばかりである。

【餘論】起首二句の外は、一寸對偶の形式を爲して居るが、平仄に關せず、例の半律半古の一體である。蔣之翹は「末二句、自らは是れ退之本色の句法」と云つて居る。

遺興聯句

遺興聯句

我心隨月光。寫君庭中央。郊我心、月光に隨ひ、君が庭の中央に寫す。

月光有時晦。我心安所忘。愈月光、時ありて晦く、我が心、安んぞ忘るるところ。

常恐金石契。斷爲相思腸。郊常に恐る、金石の契、斷えて相思の腸とならむことを。

平生無百歲。歧路有四方。愈平生、百歲なく、歧路、四方あり。

四方各異俗。適異非所將。郊四方、各、俗を異にす、適に異なるは將にする所に非ず。

驚蹄顧挫秣。逸翮遺稻梁。愈驚蹄は挫秣を顧み、逸翮は稻梁を遺る。

時危抱獨沈。道泰懷同翔。郊時危うして獨沈を抱き、道泰にして同翔を憶ふ。

獨居久寂默。相顧聊慨慷。愈獨居久しく寂默、相顧みて聊か慨慷。  
 慨慷丈夫志。可以耀鋒鋌。郊慨慷、丈夫の志、以て鋒鋌を耀かすべし。  
 蓮寯知卷舒。孔顔識行藏。愈蓮寯は卷舒を知り、孔顔は行藏を識る。  
 朗鑒諒不遠。佩蘭永芬芳。郊朗鑒、諒に遠からず、佩蘭、永く芬芳。  
 苟無夫子聽。誰使知音揚。愈苟くも、夫子の聽くなくんば、誰か知音をして揚がら

【字解】【一】寫君庭中央。君の庭の中央に我が心の影を寫すといふので、心が君の庭に馳せ行くといふ意味を一層現實的に詩化して云つたのである。【二】金石契。交情の堅きをいふ。【三】平生。生涯に同じ。【四】歧路。わかれ路。【五】遺異。まさに異なる、明かに違つて居る。【六】非所將。將は共にといふ意。【七】驚駭。即ち驚馬、やくざ馬。【八】控秣。踏まれたりして汚れた秣。【九】逸。羣を抜いた猛禽。【一〇】遺稻粟。穀物は決して食はぬ、即ち腹は飢ゑても糞を啄ばますといふ意。【一一】獨沈。ひとり河に投じて死ぬといふ節義。申徒狄といふ人が世亂を厭ひ、やがて水に投じて死せしこと、劉向新序に見ゆ。【一二】蓮寯。蓮伯玉と稱す。論語に「君子なるかな蓮伯玉、邦に道あれば仕へ、邦に道なければ卷いて之を懐にすべし」とあり、又「齊武子、邦に道あれば知、邦に道なければ愚、その知は及ぶべきなり、その愚は及ぶべからざるなり」とある。【一三】卷舒。その才を卷いて藏し、又之を舒べひろげる。【一四】孔顔。孔子と顔回。【一五】行藏。論語に「子、顔回に謂つて曰く、これを用ふれば行ひ、これを舍げば藏す、惟だ我と爾と是あるかな」とある。【一六】朗鑒。明かに觀る。【一七】佩蘭。楚辭に「佩蘭以爲佩」とある。【一八】知音。前に見ゆ。

【題義】遺興は、興を遣る、興に乗ずるといふことで、格別の意味もない。

【詩意】わが心は、月の光に随ひ、はるかに君の庭の中央に馳せて、その影を寫して居る。月光は、時あつて晦きことあるも、わが心は、決して、君を忘れることはない。常に恐るるところは、金石の如く堅いところの交情を抱きながら、千里遠く別れて、相思の餘、斷腸の想に堪へぬやうになるといふ其事のみである。この生涯は、到底百歳を保ち難く、この世は、歧路が四方に派出して、まことに迷ひ易い。されば、四方各、その習俗を異にして居て、全く相異なるものは、決して共にすることが出来ない。やくざ馬は、汗れた秣をさへ欲しがつて居るが、その羣を逸出した猛禽は、決して、穂を啄まない。人にしても、矢張、その通りで、全く其操守を異にしたものがある。又時危ければ、獨り水に沈んで死ぬといふ奇節を抱き、道泰ければ、人と一緒に翱翔することも出来るので、時勢の如何に因つて、この身の振り方も違つて来る。今しも、われは獨居して、久しく寂默に居り、世上の有様を顧みて、聊か慨慨して居る。かくの如く、丈夫の志を負うて、毎に慷慨して居る位だから、一朝機會にあらば、鋒鋌を耀かすことも出来る。蓮伯玉・齊武子は、邦の道あり道なきにつけて、その才を舒べもするし卷きもするし、孔子・顔回の如きは、その用舍如何に因つて行藏をなし、つまるところは、禍に罹らずして、功を成すことを理想として居る。幸にして、君の鑒裁、まことに遠からず、われとても、祿祿として生死するものではなく、秋闈を佩として、永く芬芳を留めたいと思つて居る。ここに於て、歌を作つて自ら朗唱したのであるが、苟くも、夫子にして之を聽かなければ、外に何人が

知音となつて稱揚して呉れやうぞ、是非とも、この歌は、君に聞いて戴きたいと思つて居る。  
【餘論】 蔣之魁は「全篇古致あり、起處の若き、更に能く變化し、益す以て莊雅、便ち晉宋の間に駁駁たり」と云つて居る。通首、知己を思ふの情の極めて殷なるを寫し、左搖右曳、しかも、その根本の趣旨を失はず、結構緊密なるは、まさしく聯句の妙を推すべく、その小じんまりして整つた處は、他に多く其類を見ざるものである。

贈劍客李園聯句

劍客李園に贈る、聯句

天地有靈術。得之者唯君。郊 天地、靈術あり、これを得たるものは唯だ君のみ。  
築爐地區外。積火燒氛氳。愈 爐を築く地區の外、積火燒いて氛氳たり。  
照海鑠幽怪。滿空敵異氛。郊 海を照らして幽怪を鑠し、空に滿ちて異氛敵し。  
山磨電奕奕。水淬龍蝟蝟。愈 山に磨いて電奕奕、水に淬して龍蝟蝟。「ならむや」  
太一裝以寶。列仙篆其文。郊 太一、裝ふに寶を以てし、列仙、その文を篆にす。  
可用懾百神。豈惟壯三軍。愈 用て百神を懾れしむべく、豈に惟だ三軍に壯たるのみ。  
有時幽匣吟。忽似深潭聞。郊 時あつて幽匣に吟す、忽ち深潭に聞くに似たり。

風胡久已死。此劍將誰分。愈 風胡、久しく已に死し、この劍、將た誰にか分たむ。  
行當獻天子。然後致殊勳。郊 行いて當に天子に獻すべく、然後に殊勳を致さむ。  
豈如豐城下。空有斗間雲。愈 豈に豐城の下、空しく斗間の雲あるが如くならむ。

【字解】 一、靈術、不思議の術、即ち擊劍の技。二、地區外、普通の宅地の外。三、積火燒氛氳、劍を鍛へる爲に盛に火を起し、そこから立ち騰る氣が陽炎の如くちらちらする。郭元振の古劍歌に「君不見昆吾鐵冶炎煙、紅光紫氣俱赫然」とある。四、幽怪、幽冥界の怪物を燒きとるかして仕舞ふ。五、敵異氛、一種特異の氣が蒸しあつく上る。六、山磨、雷煥別傳に「煥、豐城の令たりしとき、獄地を掘つて石函を得たり、中に雙劍あり、文采未だ甚だ明かならず、南昌西山の黃白土を取つて、これを磨けば、光焰照輝す」とある。七、水淬、漢書の注に「龍泉宮西平の界、その水、用つて劍を淬くべく、特に堅利」とある。八、龍蝟蝟、さういふ様にして磨いた劍は、龍の蟠まる様に見える。九、太一、吳越春秋に「秦客薛燭、善く劍を相す、曰く、直の山破れて劍を出し、若邪の窟潤れて劍を出し、蛟龍窟を捧げ、天帝炭を裝ひ、太一下り觀る、ここに於て、區治子、この劍を造爲す」とある。太一は神の名。一〇、篆其文、西京雜記に「昭帝の時、茂陵の人、寶劍を獻す、上に銘して曰く、直千金、壽萬歲」とある。一一、懾百神、多くの神神を畏れしめる。一二、壯三軍、列子に「衛の孔周、その祖殷帝の寶劍を得たり、童子これを服して、三軍の衆を知く」とある。一三、風胡、越絶書に「風胡子、吳に之いて干將を見、越にして區治子を見、劍三枝を作る。一に曰く龍淵、一に曰く太阿、一に曰く工市。楚王、これを問ふ。風胡子、對へて曰く、龍淵を知らむと欲すれば、狀、高山に登り、深淵に臨むが如し。太阿を知らむと欲すれば、その劍を觀よ、龍巖翼として、流水の波の如し。工市を知らむと欲すれば、鈞文間より起り、脊に至つて止まり、珠の如くして枉ぐべからず、文流るるが若くして絶えず」とある。一四、豐城下、雷煥の事、山磨の注に見ゆ。なほ前にも數ば見えて、晉書の張華傳をも引いて置いた。一五、斗間雲、北斗の間に立ち升る氣、自然に雲の如きをいふ。

【題義】 劍客は、即ち劍侠の類であらう。劍侠といふは、劍を以て人を刺す術を善くし、且つ隱形の法に通じ、百發百中、過たず人を殺すものである。當時、藩鎮互に權を恣にし、暗殺などが盛行はれたから、劍侠は、多くの場合に役に立つた。しかし、劍侠は元と俠を重んじ、決して非義の事を爲さないものとして知られ、その後、支那に於ては、その餘風を傳へるものが絶えず、又往往にして女流の劍侠さへあつた。この劍客の李園といふのは、如何なる人か分からぬが、いづれ、劍侠であつて、かなり其術に秀でて居たものであらう。

【詩意】 天地の間には、靈妙の術があるもので、劍客として知らるる君は、これを體得して居られるし、君の持つて居る劍は、まことに、大したものである。はじめ、大きな爐を宅地の外に造り、そこで焔に火を起すと、ちらちらとして陽炎の如きものが燃え上り、その光、焔が海を照らせば、幽怪をも鏗かし去るべく、空に滿つれば、一種怪異の氣を蒸し出す様である。この爐中に於て劍を打ち出し、それを名だたる山の土で磨くと、電光奕奕として輝きわたり、又特殊の水に涵すと、龍が蜃蜃として蟠まつて居る様である。それで、やつと磨き畢ると、太一の神が態態天より下つて、その裝飾の世話を爲し、仙人どもが相談して、篆字で銘を刻みつけて呉れた。そこで、愈よ佩用することが出来る、これを用ひて百神を畏れ服せしむべく、三軍の氣を壯にする位の事は、言はずもがな。それから、佩用せぬ時など、これを匣の中に入れて置くと、自然と聲を出し、忽ちにして、深潭の底に於て龍の長

吟するを聞く様である。むかしは、鍛刀の名人で鑒定にも長じた風胡子といふ人があつたが、その人、死して、すでに久しく、折角の此劍をも、分別して、その價値を認めて呉れる人もない。そこで行く行くは、天子に獻するが善いので、さうすれば、天晴の功勳を立つべく、かの豊城の獄底に名劍が埋もれて、北斗の間に雲の如き氣が棚引いて居たといふ様な事もなくなり、逸早く世に知られる方が善いと思はれる。

【餘論】 李園は劍客だといふのに、ここでは、その技術の事は一切言はず、唯だその持つて居る劍だけを褒めて居るのは、大に嫌らぬ様であるが、つまり、劍に託して、李園、その人が聖主の知を得て殊勳を致さむことを囑望したので、劍は即ち人、人は即ち劍、その構想も決して偶然ではない。

新添詩七首

顧注の昌黎詩集注には、この項を設けて、文集に其文と共に載せた詩を拾ひ集めて、ここに五首附載した。しかし、送陸欽州、送李愿歸盤谷の如き、その性質上、ここに擧ぐべきものと考へられる處から、同じく掲出し、仍つて七首となつた。その他、平淮西碑の末に付けた韻語の如き、柳宗元の平淮西雅と比較されるものであるが、もと銘であつて、普通に詩の中に入れぬから、ここには一切載せない。上記の七章、詩だけでは、意味も十分に分ならず、必ず其序と相待つべきものであるから、こ

ここでは、卷首に見えた元和聖德詩と同じく、その序をも併せて載録し、唯だ主眼とするところでないから、その解釋は、あつさりと遺ることにした。

鄆州谿堂詩

并序

鄆州谿堂の詩 并に序

憲宗之十四年始定東平三分其地以華州刺史禮部尚書兼御史大夫扶風馬公爲鄆曹濮節度觀察等使鎮其地既一年褒其軍號曰天平軍上卽位之二年召公入且將用之以其人之安公也復歸之鎮上之三年公爲政於鄆曹濮也適四年矣治成制定衆志大固惡絕於心仁形於色溥心一力以供國家之職于時沂密始分而殘其帥其後幽鎮魏不悅於政相扇繼變復歸於舊徐亦乘勢逐帥自置同於三方惟鄆也截然中居四鄰望之若防之制水恃以無恐然而皆曰鄆爲虜巢且六十年將彊卒武曹濮於鄆州大而近軍所根柢皆驕以易怨而公承死亡之後撥拾之餘剝膚椎髓公私掃地赤立新舊不相保持萬目

睽睽公於此時能安以治之其功爲大若幽鎮魏徐之亂不扇而變此功反小何也公之始至衆未熟化以武則忿以憾以恩則橫而肆一以爲赤子一以爲龍蛇憊心罷精磨以歲月然後致之難也及教之行衆皆戴公爲親父母夫叛父母從仇讐非人之情故曰易於是天子以公爲尚書右僕射封扶風縣開國伯以褒嘉之公亦樂衆之和知人之悅而侈上之賜也於是爲堂於其居之西北隅號曰谿堂以饗士大夫通上下之志既饗其從事陳曾謂其衆言公之畜此邦其勤不亦至乎此邦之人曩公之化惟所令之不亦順乎上勤下順遂濟登茲不亦休乎昔者人謂斯何今者人謂斯何雖然斯堂之作意其有謂而暗無詩歌是不考引公德而接邦人於道也乃使來請其詩曰

【訓讀】憲宗の十四年、はじめて東平を定めてその地を三分し、華州刺史禮部尚書兼御史大夫扶風馬公を以て、鄆曹濮節度觀察等の使となし、その地を鎮せしむ。すでに一年、その軍を褒し、號して天平軍といふ。上、卽位の二年、公を召して入らしめ、且つ將に之を用ひむとす。その人の公に安んずるを以

てや、復た之を鎮に歸す。上の三年、公、政を鄆曹濮に爲すや、適に四年、治成り、制定まり、衆志大に固く、惡、心に絶え、仁、色に形はれ、心を導にし、力を一にし、以て國家の職に供ふ。時に沂密はじめて分れて、その帥を殘ふ。その後、幽鎮魏、政を悦ばず、相扇つて、繼いで變じて奮に復歸し、徐も亦た勢に乗じ、帥を遂うて自ら置くこと、三方に同じ。惟だ鄆のみは、截然として中に居り、四鄰、これを望むこと、防の水を制する若く、恃んで以て恐るるなし。然り而して、皆曰く、鄆、虜巢たること、且に六十年ならむとし、將、彊く卒武、曹濮の鄆に於ける、州大にして近く、軍の根柢とするところ、皆驕つて以て怨み易し。しかも、公、死亡の後、擡拾の餘を承け、膚を劊ぎ、髓を推ち、公私地を掃うて赤立し、新舊相保持せず、萬目睽睽たり。公、この時に於て、能く安んじて以て之を治む、その功大なりと爲す。若し幽鎮魏徐の亂、扇いで變せずむば、この功、反つて小ならむ。何となれば、公の始めて至るとき、衆未だ化に熟せず、武を以てすれば、忿つて以て憾み、思を以てすれば、横にして肆、一は以て赤子となし、一は以て龍蛇となし、心を慮らし、精を罷らし、磨するに歲月を以てす、然る後に之を致すこと難きなり。教の行はるるに及び、衆皆公を戴いて親父母と爲す、夫れ父母に叛いて仇讐に従ふは、人の情に非ず、故に易しといふ。ここに於て、天子、公を以て尙書右僕射となし、扶風縣開國伯に封じ、以て之を褒嘉す。公も亦た衆の和を樂み、人の悦を知つて、上の賜を修なりとするなり。ここに於て、堂を其居の西北隅に爲り、號して齋堂といひ、以

て士大夫を饗し、上下の志を通ず、すでに饗し、その從事陳會、その衆に謂うて言ふ、公の此邦を畜ふ、その勤、亦た至らずや。此邦の人、公の化に業りて、惟だ之を令するところ、亦た順ならずや。上勤め、下順に、遂に茲に登ることを濟す、亦た休からずや。昔者、人、斯を何とか謂ふ、今者、人、斯を何とか謂ふ。然りと雖も、斯堂の作る、意ふに其れ謂あらむ、しかも、暗して詩歌なくむば、これ公の徳を考引して、邦人を道に接せざるなり、乃ち來り請はしむ。その詩に曰く、

帝奠九壘。有葉有年。  
有荒不條。河岱之間。  
及我憲考。一收正之。  
視邦選侯。以公來尸。  
公來尸之。人始未信。  
公不飲食。以訓以徇。  
孰饑無食。孰呻孰歎。

鄆州齋堂詩并序

六四九

帝九壘を奠め、葉あり、年あり。  
荒あり、條めず、河岱の間。  
我が憲考に及び、一たび之を收正す。  
邦を視、侯を選び、公を以て來り尸らしむ。  
公來つて之を尸る、人、はじめは未だ信せず。  
公飲食せず、以て訓へ、以て徇ふ。  
孰れか饑えて食なき、孰れか呻き、孰れか歎する。



歳は負承の覺めて願くが如し」とある。なほ押韻に就いて、蔣注に「この詩十一字、命を以て強に叶へ、願を以て水に叶ふ、皆古音なり。命に平聲の讀あり、公の獨孤及墓志、亦た淮南子に見ゆ。勿謂勿願、萬物皆自理、勿撓勿撓、萬物將自清、願は古音自ら理と叶ふなり、吳才老の補音・補韻の二書、その説、甚だ詳かなり」とある。【一九】賓客 賓客と將校。【二〇】考考 詩經に子有鐘鼓、弗鼓弗考とあつて、その注に「考は擊なり」とある。【二一】賓客 賓客として參贊する人人。【二二】賦律 賦は訪ふ。【二三】不羞 羞はす。【二四】賓客 賓客は奉、賓は離胡、即ち賓客の一種。周禮に「魚は賓に宜し」とある。【二五】歌道 賦ひ棄てる。【二六】庶 覆ふ。

【題義】蔣注に「鄆州は、秦に薛郡たり、漢に東平國たり。春秋、齊人來つて鄆を歸すとは、即ち此、今鄆城縣となつて、山東兗州府に屬す」とある。次に韓集箋正に據ると、この詩は、長慶二年、即ち韓愈の死に先つこと二年の作で、「この年、夏秋の間に作る、淺有蒲蓮、深有兼葦」等の語を以て之を見るに、十月に至つて乃ち石に勅す」とある。もと其地の鎮將たる鄆曹濮節度使馬總の爲に作つたので、その由來等は、序文中に詳しく記してあるから、今ざつと下に之を解釋する——憲宗皇帝の元和十四年、東平、即ち平廬の地を平定し、これを分つて道となし、鄆曹濮を一道となし、淄青齊登萊を一道となし、兗海沂密を一道となし、そして、華州刺史禮部尚書兼御史大夫扶風の馬總といふ人を以て鄆曹濮節度使となし、その中の一道を管轄して其地に駐在せしめた。その翌年、その軍を褒賞して、天平軍といふ號を賜はつた。今上（即ち穆宗）即位の二年に、馬總を中央政府に召し返して、これを任用しやうとされたが、その地方の人が馬總に安んじて深く信頼して居るとのことであつたから、都

に留めずして、再び鎮に歸らしめた。今上の三年、即ち長慶二年には、馬總が鄆曹濮を支配すること丁度四年になり、治法成り、制度定まり、衆志大に固く、そして、心に惡を懐くものなく、仁は色に顯はれ、心を專にし、力を一にして、國家の職に供し、上下一同、王事に盡瘁しやうと決心して居た。これより先、沂密地方では王弁といふものが觀察使王遂を殺し、自立して留後と稱し、その後、幽州なる盧龍軍都知兵馬朱克融、鎮州なる成德軍の王廷湊、魏州の魏博、兵馬使史憲誠といふものは、現在の政治を悦ばず、互に煽動して、亂を爲し、各の節度使を殺して、又ぞろ昔の状態に逆戻りをなし、徐州の武寧節度副使王智興も亦た勢に乗じ、節度使を逐うて自ら留後と稱すること、前三處に同じく、この地方一帯は、大分騒がしく成つて來た。しかし、鄆州のみは、截然として、その中央に居りながら、至つて平穩無事で、四鄰これを望むこと、恰も隄防が洪水を制するが如く、これを見てもして恐れることはなかつた。しかし、一般に言ふところに據れば、鄆州も、もと賊の巢窟たりしこと六十年、將は強く、士卒は武勇である。加之、曹濮二州は、鄆州に比して、面積も廣く且つ接近して居て、その藩鎮の根據地である處から、將士どもは皆心驕つて、つまらぬことでも怨を生じ易い。それなのに、馬公は、前節度使死亡の後を受け、一旦崩れたのを僅に拾ひ集めて再興したのを引き繼いだので、その時は、膚を剝ぎ骨の髓を打ち、公私ともに地を掃うて、全然無一物、新舊の將吏は、互に保全することも出來ず、萬目睽睽として睨み合つて居るといふ状態であつた。馬公は、この難局



を慮し、能く安んじて之を治めたから、その功績は、洪大なものである。もし幽鎮魏徐の諸鎮が互に煽動して、變を爲すことが無かつたならば、この功績は、却つて、目に立たぬ様な小さなものに成つたであらう。何となれば、馬公の始めて就任した時、一般の民衆は、未だ治化に慣れず、武を以て之を御すれば忿つて憾み、恩を以て之に臨めば、横暴にして且つ専肆であつた。そこで、一たびは無知の赤子と看做し、一たびは兎角變化し易い龍蛇と看做し、心を憚らし、精を盡くし、長い年月の間に、これを磨き上げ、やつと此の如きを致したので、随分困難なことであつたが、教化一たび行はるれば、衆皆馬公を奉戴して、親身の父母と思つて居る位。元來父母に叛いて仇讐に従ふは、人情でないから、すでに馬公の治に服したものは、もとより叛くことは無いので、かうなれば、容易であるといつても宜しい。馬公の功績、かくの如く、ここに於て、天子は、馬公を以て尙書右僕射となし、扶風縣開國伯に封じ、これを褒賞して嘉せられた。馬公も亦た民衆の平和を樂み、人の悦んで居ることを知り、そして、天子の賜を大なりとして感謝し、その記念として、一堂を其住宅の西北隅に造つて、谿堂と號し、其處で士大夫を響應して、上下の意志を疏通された。その饗宴が畢ると、從事の陳會といふものが、來會者に向つて云ふには、馬公が此邦の人民を撫育された、その御骨折は大したものでないか、この鄆州の人民が馬公の治化に繋りて、惟だ令せられる通りにするは、亦た從順ではないか。上は勤め、下に順に、遂に此の如き治績を爲したのは、まことに、結構な事ではないか。むかしの人

は之を如何思ふか、今の人は之を如何思ふか。しかし、この谿堂を造られたのは、キツと趣意の有ることであらう。それなのに、黙つて居て、詩歌さへ無くむば、これ即ち馬公の徳を宣傳して邦人を道に迎へる所以では無いといふので、そこで、使を韓愈の處に寄越して、何か作つて呉れろといつたら、韓愈は、これを諾して次の一章を作つた——といふので、次に其詩が載せてある。

【詩意】天子が九州の土を治められしより、ここに何代を經、何年を過ぎたか。然るに、黄河泰山の間に荒漠の地があつて、兎角治まらぬ。先帝憲宗の御宇に、一たび之を收めて始末をつけ、邦土を區劃し、節度たるべき人を選び、遂に馬公を任命されたから、馬公は、敕命を畏み、やがて來つて、その地を治められた處が、その地の人民は、はじめ馬公を信頼しなかつた。そこで、馬公は、飲食する暇もなく、これを教へ、これを徇へ、力を盡して世話をされた、誰が飢えて食なきか、誰が呻つてうめいて居るか、誰が嘆息して居るか、誰が冤罪あるも問はれず、又分願を得ずして苦んで居るか、誰が邦の害蟲となること、稻の節や根に食ひ入る蟲の如きか、或は又羊の如く意地わるく、狼の如く貪り、そして、碌な事を喋舌らず、城を覆す様なことをするか。かくの如きものに對しては、一一之を始末し、これを吹いてやり、これを暖めてやり、手を摩して撫でてやり、これに針を打つてやり、之に藥を飲ませてやり、ひどい奴は仕方が無いから、驅らし者にした上に磔にする。かくて、馬公の境内は、すでに富み、すでに強く、馬公を尊崇して、吾が父となし、これに懐いて、その令に違ふものな

いやうに成つた。かうなれば軍隊を繰り出して、各地の叛將を征伐することさへ出来るので、ひとり自分の邦土を守るのみではない。かくの如く、境内がすっかり治まつたから、その記念として、谿堂を其住宅の隅に造られたが、その名の如く、流水播播として平かに鋪いて居る。そして、水の浅い處には蒲や蓮が生えて居るし、深い處には葦葦の類が抽き出て居る。馬公が賓客を會して、宴を催されるときは、鼓聲駭駭として鳴り響くのが常であるが、就中、この新築の谿堂に於て宴を開かれるときは、賓客たる將校の面々は、酒に酔ひ、肴に飽き、そして眺めやれば、流には魚の跳るがあり、岸には鳥の集まれるがあり、愈よ興を助けるから、歌ひつ、舞ひつ、鼓聲は考考として、更に賑やかに響く。しかし、ここは宴會に使用するばかりでなく、馬公は谿堂に居て、琴瑟を御し、そして、幕僚どもを此に會して、經を稽へ、律を訪ひ、治國濟民の事に就いても、色色研究せられ、これを實際に施して違はず、人が之を用ひても屈挫することがない。堂の名にしおふ溪の中には、浮草もあり、菰もあり、龜も居れば、魚も居る。そして、閒暇の折折は、馬公自ら中流に居り、左右に詩書を置いて、時たま之を緝かれる。願はくは、人民どもを厭ひ棄つることなく、そして、その治下を克く覆育して愈よ功績を擧げられる様にありたい。

【餘論】 蔣注に「相傳ふ、皇甫湜の手帖に云ふ、鄆塘は特に高古の風あり、敢て降旗を樹てむや。而して、作者の下、何人能く及ばむ。崔侍御、前日稱嘆す、終席滿座、燭を繼ぐことを覺えず、我が唐、國を有してより、退之文宗一人のみ、欽慰の極に任へず。湜の侍郎宗伯に上る、鄆塘は正にこの鄆州の溪堂を謂ふなり。公、時に兵部侍郎たり、宗伯といふは、文章の宗伯なり」とある。これは、主として、その文に就いて云つたものであるが、この詩も亦た古意古調、當時に在つて稀に見るところ、流石に學人の作たるに負かぬものである。

送陸欽州詩

并序

陸欽州を送る詩

并に序

貞元十八年二月十八日、祠部員外郎陸君出刺欽州。朝廷夙夜之賢、都邑游居之良、齎咨涕洟、咸以爲不當去。欽大州也、刺史尊官也。由郎官而往者、前後相望也。當今賦出於天下、江南居十九、宣使之所察、欽爲富州、宰臣之所薦、聞天子之所選用、其不輕而重也。較然矣。如是而齎咨涕洟、以爲不當去者、陸君之道、行乎朝廷、則天下望其賜、刺一州、則專而不能咸、先一州而後天下、豈吾君與吾相之心哉。於是昌黎韓愈、道願留者之心、而泄其思、作詩曰。

【訓讀】貞元十八年二月十八日、祠部員外郎陸君、出でて歙州に刺たり。朝廷夙夜の賢、都邑游居の良、齋咨涕洟、咸な以爲へらく、當に去るべからず、と。歙は大州なり、刺史は尊官なり、郎官よりして往くもの、前後相望めり。當今、賦の天下に出づる、江南は十の九に居り、宣使の察するところ、歙を富州となす。宰臣の薦聞するところ、天子の選用するところなり。その輕からずして重きや、較然たり。かくの如くして、齋咨涕洟、以て當に去るべからずと爲すは、陸君の道、朝廷に行はるときは、天下その賜を望み、一州に刺たるときは、專にして、咸きこと能はず、一州を先にして天下を後にす、豈に吾が君と吾が相との心ならむや。ここに於て、昌黎の韓愈、留まらむことを願ふ者の心を道うて、その思を泄らし、詩を作つて曰く、

我衣之華兮。我佩之光。

我が衣の華なる、我が佩の光れる。

陸君之去兮。誰與翱翔。

陸君の去る、誰と與にか翱翔せむ。

斂此大惠兮。施于一州。

この大惠を斂めて、一州に施す、

今其去矣。胡不爲留。

今その去る、胡ぞ爲に留めざる。

我作此詩。歌于達道。

我、この詩を作つて、達道に歌ふ。

無疾其驅。天子有詔。

その驅ることを疾にするなかれ、天子詔あらむ。

【字解】【一】華、華美、立派なること。【二】佩、佩玉、腰に佩びたる玉の飾、將注に「一校本に光輝の下皆令の字あり、去の下に令の字なし。今古詩賦を按ずるに、句句韻及び語助を用ふるものあり、廣歌、是れなり。隔句に韻及び令を用ひ、而して、令、上句の末に在り、韻、下句の末に在るものあり、廣韻、是れなり。隔句韻を用ひ、而して、上句韻あらず、令あらず、下句、韻を押し、令あらずものあり、隔句の類、是れなり。今、この詩、もし廣歌の例を用ふれば、華光、令あつて韻せず、その去の字の一句、又并せて無きなり。もし廣韻の例を用ふれば、光輝、當に韻を用ふべく、而して、當に令あらず。華、以て令あるべしと雖も、而して、去復た以て令あるべからざるなり。もし隔句の例を用ふれば、下三句、令あらず。而して首句、當に令あるべからざるなり。韓公は、腰に深きものなり、應に此の如くなるべからず。蓋し、校本从ふところ、これを失ふなり。今、定めて諸本に从ひ、腰及及び買取風の首章を以て例となす。もし隔句を以て例と爲さむと欲すれば、止だ校本首句一の令字を去るのみ、尤も簡便となす。但し、此本なし、敢て意を以て創めざるのみ」といつて居る。【三】翱翔、鳥の飛び廻はること。ここでは、遊行、又は周旋の義。

【題義】陸歙州、名は修。貞元十八年二月、祠部員外郎を以て、出でて、歙州に刺史となつたから、韓愈は詩を以て送り、併せて序を作つたのである。例の如く序の大意を下に述べると——貞元十八年二月十八日、祠部員外郎陸君は、長安を出でて、歙州の刺史となつた。そこで、朝廷に在官し、朝早く出勤し夜遅く退廳するといふ賢良なる吏僚、竝に都鄙に游居する良民どもは、一齊に嘆息涕洟し、かういふ人は、いつまでも、中央政府に居るが善いので、決して、長安を去るべき譯のものではないといつた。しかし、歙は大州であるし、刺史は、尊貴の官職である。郎官から、かくの如き刺史に

任せられて出かけるものは、前後相望んで、その先例、頗る多く、無論、陸君に取つては榮轉であつて、先づ目出たいと申さねばならぬ。今日、天下の租税は、江南が十分の九を占めて居る。そして、宣慰使などの檢察するところに據ると、歛は富有の州である。その州の刺史として、内閣大臣が推薦して奏聞し、天子が選用されたのであるから、陸君の歛州に刺たるや、もとより、輕からずして、その任務の重いことは、較然として明白である。然るに嘆息流涕して、陸君は都を去つてならぬといふものの考は如何といふと、陸君の道が中央政府の朝廷に行はるれば、天下を擧げて其賜を望み、つまり、御蔭に預ることが出来るが、一州の刺史となるときは、その州だけ其賜を專有し、決して、天下に遍ねく行き渡ることは出来ない。かくて、一州を先にして天下を後にするは、吾が天子と宰相との本心ではあるまい、これは、千慮の一失に相違ないと、かう云ふのである。そこで、昌黎出身の韓愈は、陸君を留めたいと願ふ人人の心中を道うて、その思を泄らさむが爲に、左の如き詩を作つた。

【詩意】わが著て居る衣裳は華美であるし、我が腰に付けた佩玉は燦爛として光つて居る。しかし、陸君にして都を去らば、今後、誰と共に周旋すべきか、陸君の大惠を斂めて、唯だ一つの州に施すことになり、今愈よ出立されるといふのに、何故、わが爲に陸君を引き留めないのか。われは、此詩を作つて、都大路を歌つて歩く。陸君よ、その馬を驅ることを急がずに、すこし緩つくりして、ぼつぼ

つ行くが善からう。もしかすると、天子が詔を下されて、陸君の地方就任は、沙汰止みになるかも知れない。

【餘論】これは、序に於て一般人の志望を述べ、詩に於て自分も亦た同じ様な考を持つて居るといふ様なことを云つたので、序と詩と、兩兩相俟つて、はじめて、その眞意を見るべく、どちらか一つでは意義が十分でない、これは、まさしく韓愈の創體であらう。

送李愿歸盤谷

井序

李愿の盤谷に歸るを送る

井に序

太行之陽有盤谷。盤谷之間。泉甘而土肥。草木藂茂。居民鮮少。或曰。謂其環兩山之間。故曰盤。或曰。是谷也。宅幽而勢阻。隱者之所盤旋。友人李愿居之。愿之言曰。人之稱大丈夫者。我知之矣。利澤施于人。名聲昭于時。坐于廟朝。進退百官。而佐天子出令。其在外。則樹旗旄。羅弓矢。武夫前呵。從者塞途。供給之人。各執其物。夾道而疾馳。喜有賞。怒有刑。才峻滿前。道古今而譽盛德。入耳而不煩。曲眉豐頰。清聲而便體。秀外而惠中。飄輕裾。翳長袖。粉白黛綠者。列屋而閒居。妬寵而負恃。爭妍而取

憐大丈夫之遇。知於天子。用力於當世者之所爲也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不可幸而致也。窮居而閒處。升高而望遠。坐茂樹以終日。灌清泉以自潔。採於山。美可茹。釣於水。鮮可食。起居無時。惟適之安。與其有譽於前。孰若無毀於其後。與其有樂於身。孰若無憂於其心。車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。大丈夫不遇於時者之所爲也。我則行之。伺候於公卿之門。奔走於形勢之途。足將進而趨。口將言而囁。處穢汙而不羞。觸刑辟而誅戮。僥倖於萬一。老死而後止者。其於爲人。賢不肖何如也。昌黎韓愈。聞其言而壯之。與之酒。而爲之歌曰。

【訓讀】太行の陽に盤谷あり。盤谷の間、泉甘くして土肥え、草木藂茂、居民鮮少。或は曰く、その兩山の間を環るを謂ふ、故に盤といふと。或は曰く、この谷や、宅幽にして勢阻、隱者の盤旋するところと。友人李愿、これに居る。愿の言に曰く、人の大丈夫と稱するもの、我、これを知る、利澤人に施し、名聲時に昭かに、廟朝に坐し、百官を進退し、而して、天子を佐けて令を出す。その外に在つては、旗旄を樹て、弓矢を羅ね、武夫前に呵し、從者途を塞ぎ、供給の人、各、その物を執り、道を夾

んで疾く馳す、喜べば賞あり、怒れば刑あり、才峻前に満ち、古今を道うて盛徳を譽め、耳に入つて煩はしからず、曲眉豊頬、清聲にして便體、外に秀でて中に惠なる、輕裾を飄し、長袖を翳し、粉白黛綠の者、屋を列して閒居し、寵を妬んで恃を負ひ、妍を争うて憐を取る。大丈夫の天子に遇知せられて、力を當世に用ふる者の爲すところなり。吾、これを惡んで之を逃るるに非ず、これ命あり、幸にして致すべからざるなり。窮居して閒處し、高きに升つて遠きを望み、茂樹に坐して以て日を終り、清泉に濯うて以て自ら潔くし、山に採つて、美茹ふべく、水に釣して鮮食ふべし、起居時なく、惟だ適これを安んず。その前に譽あらむよりは、その後に毀なきに孰若ぞ。その身に樂あらむよりは、その心に憂なきに孰若ぞ。車服維がす、刀鋸加へず、理亂知らず、黜陟聞かす。大丈夫の時に遇はざる者の爲すところ、我は之を行はむ。公卿の門に伺候し、形勢の途に奔走し、足將に進まむとして趨起し、口將に言はむとして囁し、穢汙に處つて羞ぢず、刑辟に觸れて誅戮せられ、萬一を僥倖し、老死して後に止むもの、その人たるに於て、賢不肖、何如ぞやと。昌黎韓愈、その言を聞いて之を壯として、これに酒を與へ、これが爲に歌うて曰く。

盤之中、維子之宮。盤の中、維れ子の宮。  
盤之土可以稼。盤の土、以て稼すべく、

送李愿歸盤谷并序

【字解】【一】盤、盤谷の略。  
【二】維、是れに同じ。  
【三】宮、宮室の宮、家と同義。何も立派な宮

盤之泉可濯可沿。盤の泉、濯ふべく沿ふべし。

盤之阻誰爭子所。盤の阻、誰か子の所を争はむ。

窈而深廓其有容。窈にして深、廓として其れ容るるあり。

繚而曲如往而復。繚つて曲り、往いて復るが如し。

嗟盤之樂兮。嗟盤の樂、

樂且無央。樂んで且つ央なし。

虎豹遠跡兮。虎豹跡を遠ざかり、

蛟龍遁藏。蛟龍遁藏し。

鬼神守護兮。鬼神守護して、

呵禁不祥。不祥を呵禁す。

飲且食兮壽而康。飲み且つ食ひ、壽にして康、

無不足兮奚所望。足らざるなし、奚ぞ望むところ。

膏吾車兮秣吾馬。吾が車に膏し、吾が馬に秣ひ、

從子于盤兮。

終吾生以徜徉。

子に盤に従ひ、

吾が生を終るまで、以て徜徉せむ。

【題義】ここに在る李愿に就いては、蔣注に「この序、貞元十七年に作る。公、年わづかに三十四のみ。愿は、西平忠武王晟の子」とあつて、魏叔子・杜子皇も同説である。しかし、閻若璩は、證を擧げて之を辨じ、別に同名の隱士李愿といふものがあつたといひ、その言は、茶餘客話にも引いてある。李西平は、徳宗時代の大功臣であつて、その子の李愿は、貞元十七年頃には、宿衛の將となつて、幅を利かし、なかなか山に引ッ込むどころではなく、且つその人物も親に似ずして、案外つまらなく、荒侈を以て敗れ、權近に結納したといふことである。但し、隱士の李愿は、盤谷に居たといふ外、一切分ならず、いはば、この序に因つて、幸に其人ありと後世に知られて居るだけのことである。盤谷は、卷五盧郎中雲夫寄三示詩の題下に注して置いたが、太行山中の溪谷で、孟州濟源縣に在る。それから、例の如く、下に序の大意を解説すると——太行山の南方に、盤谷といふ處がある。その盤谷の間は、泉が甘くて、土地が肥え、自然に草木が繁茂して居るが、浮世に遠くして、居民は極めて少い。そこを何故盤谷と名づけたか、盤は元とめぐるといふ義、そこで、或人は、その谷が兩山の間にくぐり入つて居るから、盤と名づけたといふし、或人は、この谷には居宅を構へられるが、甚だ幽僻であ

殿ばかりを云ふのではなく、禮記に「備に一飯の宮あり」とさへある。【一】 稼、稼穡する、耕作する。【二】 可沿、流に従つて上下する。【三】 阻、屈折、地勢の麗なるを云ふ。【四】 窈而深、窈は幽靜にして奥深き貌。【五】 廓、からりとして開いて居ること、空虚の貌。【六】 有容、その居を容れることが出来る。【七】 繚而曲、盤谷の中に通じて居る路がめぐり廻つて居る。【八】 央、半ばといふのが本義であるが、このは、かぎると訓すべし。【九】 壽而康、命が長くして安寧無事であるといふこと。【一〇】 膏、即ち油、車に油をさして出かける用意をする。【一一】 秣、馬に秣を與へて出かける用意をする。

つて、その地勢も、懸け離れて遠く、謂はゆる酒屋へ三里、豆腐屋へ二里、隠者どもが遊びめぐるか  
ら、盤と名づけたのであるといつた。いづれにしても、閒静な好い處、名が既に其實を示して居るので、  
ここに、わが友李愿といふ男が住んで居る。李愿の平生の言ひ草は、下の如くである。世間から推稱  
せられて、あれこそ大丈夫といはれるものは、大抵分かつたもので、利益徳澤を人に施し、その名譽  
を明かにして、誰知らぬものもなく、廟堂の上に坐わり込んで、百官を或は進め或は退け、天子を輔  
佐して號令を出し、一寸外に出かけるときには旗旄を立て、弓矢をつらね、武士は、その行く先を拂  
ひ、従者は、そろそろと路に一ばいに成る位、打揃つて、主人公を護衛して、スハといふ時の用心を  
爲し、色色の御用人は、その物を執つて、路の兩側を走り、何か欲しいといへば、途中でも直ぐに事  
が辨じる。それで勢威の赫灼たる、飛ぶ鳥も落ちる程で、一寸喜ばれると賞賜があるし、怒られると  
刑罰を被る。そこで、内に御還りになると、一代の才俊といはれる人が、幫間の役を務めて、御前に充  
ち満ち、古今の人物を例に引いて、主人公の盛徳をほめそやし、いかにも巧にいふ諂諛であるから、  
耳に入つても、決して、うるさくはなく、それと知りつつも嬉しい位。それから本能の満足させる  
爲めには、眉は麗しく頬はぼつてり、聲は涼しくして歌ふに適し、體はしなやかで舞ふには持つて來  
いといふ位、外貌すでに秀美なる上に心は伶俐、能く氣が利いて、痒い處へ手が届くばかり、それ  
が軽い裾を飄し、長い袖を振りかざし、おしろいは白く、眉墨は緑に、さながら畫けるが如き美人

が幾人もなく、金屋をつらね、何もせずして閒居し、或は他の寵を妬み、或はおのが美を憐み、朝か  
ら晩までお化粧三昧、散散にめかし込んで、主人公の愛憐を得やうと心がけて居る。大丈夫が天子の  
お眼鏡に叶ひ、樞要な位地に上り、その才力を十分に當世に布き行ふ者の爲すことは、大抵上の様な  
ことである。かく申す某も、矢張人であるから、何もこれが厭だといつて、わざと世を避けたので  
はないが、もともと天命の然らしめるところで、僥倖を願つて得られるものでないから、今更致方なく  
格別求めやうとしない。かかる世間的態度とは丸で打つて變つて、貧窮に居り、民間に暮らし、高い  
處に登つて遠景を望み、ある時は木蔭に坐して日を送り、ある時は清泉に臨んで心身を洗ひ、山に入  
つて薇蕨を採れば、その味のうちまき、水に釣つて魚蝦を得れば、その新らしき、とても、都に居て  
は求められない。それから、起きるも、寐るも、勝手次第で、時間の制限といふものなく、唯だ心の  
思ふ儘にして安んじて居る。全體、わが前で寝られるよりも、後に於て誦られない方が餘程宜しく、  
身體にこれぞといふ樂がなくとも、精神に苦痛の無い方がはるかに勝つて居る。それで官位なきが  
故に、車服を繋ぐ面倒もなく、罪にかかるともなきが故に、刀鋸を加へられることもない。かくて  
全く世を棄て世に棄てられたから、天下の治亂も知らず、朝廷の進退も聞かず、まことに、のん氣で、  
長生が出来さうである。これは大丈夫といはれるものが當世に用ひられず、自ら勇退する者の爲すと  
ころであつて、自分は、今之を行はうと思ふのである。われは天命に協はぬ故、世に謂はゆる大丈夫

の事も出来ず、止むを得ず隠者の事を行はうとするのであるが、翻つて考ふれば、去るべき時に去らず、思ひ切り悪くへばり付いて、富貴利祿を求めると、まことに情なく、われながら善いことをしたと思ひ當る節がある。彼等は、公卿の門に御機嫌伺ひに罷り出で、權要の相會する處に奔走して、お世辭を振りまき、御無理御尤もで押し通し、泣く兒と地頭とは勝てぬといふので、足は往かうと思つても、びくびくして往くことも出来ず、口は言ひたいけれども、もちもちして物いふことも出来ず、鼻息を伺ひ、お髯の塵を拂ひ、散散汗らしい真似をしながらも、恬として恥とも思はず、時には刑憲に觸れて誅戮される様な危険な目に遭ひ、萬一の場合を僥倖して、幸福を得やうと心がけ、一生かくの如くして、空しく暮らして仕舞ふ。かくの如き手合と自ら不遇なることを知つて隠遁するものと、その人たる點に於て、いづれか賢、いづれか不肖、それは言ふまでもないことであらう。李愿の言葉を、昌黎の韓愈、即ちかく申す某が聞いて、その心意氣を壯なりとし、末世の今には珍らしい氣骨ある男だといふので、別れる時に酒を與へて飲ましめ、又わざわざ詩を作つて之に贈つたが、その文句は、左の如くである。

【詩意】名だたる盤谷の中は、李愿の住處であるし、盤谷の地は、李愿の稼穡する處である。盤谷の泉は、心身を濯ふべく、流に従つて上下し、その風景を賞することも出来る。盤谷は、その路が險阻であつて、何人が來つて汝の居處を争ひ奪はうぞ、全く獨占といつても善い位。それで、盤谷は、幽邃にして奥深いが、その内部は、案外にも廓然として開け、そこに居宅を構へることが出来、溪谷の地勢は、めぐり曲つて、往けども、往けども、又ぞろ後へ戻る様な氣がする程である。かかる谷の中に住んで居ると、浮世の塵も飛んで來ないから、その樂は、かぎりなく、山は深しと雖も、虎豹など跡を遠ざけて、害を加へることもなく、水は近しと雖も、蛟龍は遁藏して、禍を及ぼすことなく、李愿その人、すでに隱君子であるからには、鬼神も、それとなく守護し、不祥の者を叱りつけて、これを禁厭するであらう。そこで、悠悠として山肴野味を飲食し、爲すこともなく暮らして居ると、命は長くして、身は健かであるし、何も望まなければ、決して不足に感ずることもない。ああ、まことに羨むべき境涯である。われも、いつかは車に油をさし、馬に秣ひ、李愿その人に盤谷に従ひ、ともに隠れて閑居の樂を恣にし、一生を終るまで、山水の間に徘徊し、世の憂きふしを忘れて仕舞ひたいものである。

【餘論】この篇の序はあつさりとして、まことに宜しい。その第一節は得意の人を形容し、第二節は閑居の人を形容し、第三節は奔走伺候の人を形容し、其於て爲人、賢不肖何如也といひ、讀者の判斷に任かせて、自然旨意を明かにした處は、餘情に富み、含蓄が深く、比較的に學び易くて好い。しかし、これを絶妙の大文章とするのは、ちと不賛成で、予は東坡の言を疑ふものである。東坡は何と云つたかといふと、曰く「歐陽公言ふ、晉に文章なし、惟だ陶淵明の歸去來の辭のみを。余謂ふ、唐に文章な



し、韓退之の送李愿師盤谷序のみ。平生、この作に效はむと欲し、毎筆を執つて輒ち罷む、因つて、自ら笑つて曰く、且つ退之をして獨歩せしむるに若かず、と。しかし、熟ら考ふれば、これは東坡が聊か爲にするところあつて、唯だ一寸真似の出來ないところを褒めたものと見れば善いので、これを本當にしたならば、東坡は、一個の没眼識漢たるに終るであらう。それから、蔣注に「按ずるに、この序、孟州濟源縣に石刻あり、その間、少しく異同あり、唐人の跋に云ふ、昌黎韓愈は知名の士、願の賢を高しとす、故に序して之を送る云云と。歐陽の集古錄に曰く、當時、退之、官尙ほ未だ顯はれず、その道、未だ當世に宗師とせられず、故に但だ知名の士と云ふなり、然れども、當時願を送るもの少からずと爲す、而して、獨り此序を刻す、蓋し、その文章、すでに時に重んぜらるるなり」とある。最後に、詩だけに就いて、瞿景淳は「一歌尤も灑落」といひ、蔣之翹は「歌詞精峭にして、離騷招隱の遺に似たり」といひ、ともに、簡單ながら、善く當つて居る。

送張道士 井序

張道士を送る 井に序

張道士嵩高之隱者。通古今學。有文武長材。寄迹老子法中。爲道士。以養其親。九年。聞朝廷將治東方貢賦之不如法者。三獻書。不報。長揖而去。京師士大夫多爲詩以贈。而屬愈爲序。詩曰。

去京師士大夫多爲詩以贈。而屬愈爲序。詩曰。

【訓讀】張道士は嵩高の隱者、古今の學に通じ、文武の長材あり、跡を老子の法中に寄せて道士となり、以て其親を養ふこと九年、朝廷、將に東方貢賦の法の如くならざるを治めむとするを聞き、三たび書を獻せしが報せられず、長揖して去る。京師の士大夫、多く詩を爲つて以て贈り、而して、愈に屬して序を爲らしむ。詩に曰く、

大匠無棄材。尋尺各有施。

大匠に棄材なし、尋尺各施すあり。

況當營都邑。杞梓用不疑。

況んや都邑を營むに當つては、杞梓用ひられむこと疑はず。

張侯嵩山來。面有熊豹姿。

張侯、嵩山より來る、面に熊豹の姿あり。

開口論利害。劍鋒白差差。

口を開いて利害を論ず、劍鋒白差差たり。

恨無一尺捶。爲國答羌夷。

恨むらくは、一尺の捶、國の爲に羌夷を答つなきを。

詣闕三上書。臣非黃冠師。

闕に詣つて、三たび書を上る、臣は黃冠の師に非ず。

臣有膽與氣。不忍死茅茨。

臣は膽と氣とあり、茅茨に死するに忍びず。

又不媚笑語。不能伴兒嬉。乃著道士服。衆人莫臣知。臣有平賊策。狂童不難治。其言簡且要。陛下幸聽之。天空日月高。下照理不遺。或是章奏繁。裁擇未及斯。寧當不埃報。歸袖風披披。答我事不爾。吾親屬吾思。昨宵夢倚門。手取連環持。今日有書至。又言歸何時。霜天熟柿栗。收拾不可遲。嶺北梁可構。寒魚下清伊。既非公家用。且復還其私。

又笑語に媚びず、兒嬉に伴ふ能はず。乃ち道士の服を著つて、衆人、臣を知るなし。臣に賊を平らぐるの策あり、狂童治め難からず。その言簡にして要、陛下幸に之を聽け。天は空しうして、日月高く、下に照らして理遺さず。或は是れ、章奏繁くして、裁擇未だ斯に及ばず。寧ろ當に報を埃たすして、歸袖、風披披たるべし。我に答ふ、事、爾らず、吾が親、吾に思を屬す。昨宵、夢に門に倚り、手に連環を取つて持す。今日書あり至る、又言ふ、歸るは何の時ぞ。霜天柿栗を熟し、收拾遅かるべからず。嶺北梁構ふべし、寒魚、清伊を下らむとすと。すでに公家の用に非ざれば、且く復た其私に還らむ。

從容進退間。無一不合宜。

從容たり進退の間。一として宜しきに合はざるなし。

時有利不利。雖賢欲奚爲。

時に利と不利とあり、賢と雖も奚爲せむと欲する。

但當勸前操。富貴非公誰。

但だ當に前操を勵ますべし、富貴、公に非ずして誰ぞ。

【字解】【一】大匠無棄材。立派な大工は、どんな材木でも吃皮用に立てるから、すたり物は無い。【二】尋尺。尋は八尺、即ち一ひる、大小長短といふ義。【三】杞梓。杞は枸杞、即ちく、梓はあづき。枸杞は、根が薬になり、梓は版木にしたり、又弓にしたりするが、ともに建築用の材木ではない。【四】張侯。侯は公といひ、君といふに同じ。【五】嵩高。即ち嵩山、前に數ば見ゆ。【六】差差。はつきりと見える、と。【七】振。振、しもと。【八】莞夷。ともに未開の種族で、莞は西方、夷は東方であるが、こゝでは引ッ括めて蠻夷と見れば善い、即ち叛賊を蔑視して云ふ。【九】黄冠。道士の戴くもの。【一〇】茅茨。草ぶきの家。【一一】狂童。詩經などに數ば見ゆる字面で、こゝでは賊魁の義に用ふ。【一二】章奏繁。上書の個條が繁多なること。【一三】裁擇。裁は取裁、えり分けること。【一四】歸袖。歸り行く人の袖。【一五】披披。ひらひら翻へる貌。【一六】屬吾思。思を吾に屬す、自分の事を心にかけて居る。【一七】連環。丸い環。環は還と音通で、從つて、その謎語として用ふる。環を手を持つて、この環、即ち還の音の通り、早く歸れといふ義。【一八】清伊。伊は川の名、即ち伊水。前に序中及び詩中の嵩高が、或は嵩南に作つてある處から、朱子は「伊水は、嵩北に在り、もし、前兩處、嵩南に作らば、即ち此處、伊に作るべからず。若し、彼の嵩高に作らば、これ乃ち伊に作るべきのみ」といひ、蔣之魁は之を辨じ「本文、すでに嶺北といふ、その伊の字たること、疑なし、即ち前に嵩南に作るも、亦た何の礙か之あらむ」といつて居る。【一九】前操。道士として嵩高に隱居して居る其高操。

【題義】張道士は、他書に見えぬから、その經歷は、少しも分ならず、唯だこの序に依つて、その人、塵外に居るも濟世の志あるものだといふことが分かるだけである。前に韓愈の遺詩に、飲城南道邊

古墓上、蓬中丞過贈兵部衛員外少室張道士一首があつて、その條下に注した通り、その張道士は、矢張この人であらうと思はれる。趙嘏北は「昌黎」道を以て自ら任ず、孟子、楊墨を距ぐに因つて、故に終身亦た佛老を闢く。その世の仙を求むるものに於ける、もとより謂ふ、吾寧屈曲在世間、安能從汝巢神仙と。佛骨を諫むるの一表、尤も生平の定力を見る。然れども、平生往來するところ、又二氏の人多し。張道士を送るが如き、詩あり。惠師・靈師・澄觀・文暢・大顛を送る、皆詩文あり。或は疑ふ、その交遊、檢束なく、平日の持論と互に異なるを。知らず、昌黎、正に此を借つて以て其議論を暢べむとするを（中略）張道士に於ける、亦た貶詞なし。すなはち、その上書して事を言ひ、用ひられずして歸る、もとより、尋常黃冠者流に異なるを以てなり」と云つて居る。それから、蔣注には「退之の贈、意、詩に在り、序は特だ詩の小引たるのみ、李漢、これを此に次す、殊に體を失へりと爲す」とあるのは、至極尤もなことである。例に依つて、序の大意を述べると——張道士は、嵩山に住んで居る隱者で、古今の學に通じ、文武兩道に達した天晴の材能あるに拘はらず、身を老子の法に託して道教を信奉し、道士となつて其親を養つて居た。元和九年、朝廷に於ては、法度の通りに貢賦を上納せぬ東方の藩鎮を始末されむとする計畫ある由を聞き、三たび闕下の上書して、その經綸を述べた處が、御取り上げに成らなかつた故に、長揖して都より嵩山に歸ることにした。そこで、長安の士大夫どもは、甚だ氣の毒に思ひ、詩を作つて之に贈るもの多く、そして、韓愈に命じて其序を

作らしめ、韓愈も、亦た次の詩を作つた。

【詩意】立派な大工には棄てる材木なく、どんな物でも用に立て、長短ともに各施すところがある。まして、都邑を經營するに當つては、枸杞や梓の如きものでも、用ひられることは、もとより疑が無い。これと同じく聖天子が至治を布かれるに際しては、草莽野人の言でも、必ず御聞取りに成るべき筈である。さきに、張君は、嵩山から上京されたが、顔は熊豹の姿で、中中しつかりして居るし、口を開いて政治上の利害得失を論ずれば、劍の鋒先が、はつきりと白く見えるやうである。若し一尺の鞭を與へたならば、國家の爲に、羌夷に比すべき彼の叛賊輩を敲き仆すであらうに、さう出來ないのは、まことに遺憾である。張君は、三たびまで闕下に至つて上書し、私は、元來、道士でも何でもない、膽氣があつて、茅茨の中に平然として死するに忍びず、又他人の笑語に調子を合はせて媚びることも出來ず、子供らしい游戲の御相手をすることも出來ず、世の中の事が馬鹿げて居るから、止むなく道士の衣服を着けて韜晦して居るので、誰も本當に私を知つて居るものはありませぬ。私には、賊を平ぐる策略があつて、かの賊魁を取つちめることも、さう六つかしくはありませぬ。その要領を手短かに申し上げますから、願はくは、陛下、これを聴き玉へと申し上げた。聖天子の徳はからりとした青天の上に、日月の高く懸るが如く、下土を照らして、一物をも残さぬ筈であるのに、御返事の無いのは、ひよつとすると、その章奏が餘り頻繁なる爲に未だ決裁選擇に及ばず、その儘、留め置かれ

る爲めでもあらうか、然らば、御挨拶を待たずして、歸り行く衣の袖を、ひらひら風に翻すのは、あまり短氣過ぎるでは無からうか。すると、張君は徐に之に答へて、否否、決して、さういふ次第ではない、吾が親は、絶えず吾が事を思つて居られるので、昨夜の夢には、門に倚つて吾を待ちつつ、丸い環を手にし、早く還つて来いと言ひたげの氣色を爲せるを見たり、今日は、手紙が来て、何日歸るかといはれた。時しも秋、霜が降つた後には、柿や栗の實が熟したから、早く取り入れる必要があるし、寒魚が清き伊水の流に上るについては、嶺北に梁を設けて、それを捕獲せねばならぬ。すでに、御上の用を仰せ付けられぬ上は、しばらく立ち還つて、一家の私事を始末する必要があるから、それで、俄に出立するのであるといつた。なる程、承れば、御尤もな次第、張君は、進退の間、毎に従容、一として其宜しきに合はぬことはない。今回の不本意は、推察致すが、時には、利あり、不利あり、たとひ賢者でも、何とも仕方がない。それにつけても従前の高操を更に勵まされむことを希望するので、眞正の富貴は、張君の一身に限られて居る。

【餘論】大匠の四句は、張道士の言、必ず聖明の采擇あるべきことを云うて總提となし、張侯嵩高來より陛下幸聽之に至る十八句は、その人物材能より今次の上書に及び、天空日月高の四句は、その報せざりし所以を揣摩し、章奏の繁を言うて、天子の聖徳を傷けず、寧當不埃報の二句は問、答我事不爾の十二句は答、これに因つて、張道士の東歸は、必ずしも、上書の採用されぬ其不滿の爲でもないといひ、聊か之を慰める意味合もあつて、極めて面白く、時有利不利の四句は、更に將來の修養を望んだので、富貴の二字は尋常費用せるものより以上に、深い意味があると見ねばならぬ。

送鄭十爲校理

井序

鄭十の校理と爲るを送る 井に序

祕書御府也。天子猶以爲外且遠。不得朝夕視。始更聚書集賢殿。別置校讐官。曰學士。曰校理。常以寵丞相爲大學士。其他學士皆達官也。校理則用天下之名能文學者。苟在選。不計其秩次。惟所用之。由是集賢之書盛積。盡祕書所有。不能處其半。書日益多。官日益重。四年。鄭生涵始以長安尉。選爲校理。人皆曰。是宰相子。能恭儉守教訓。好古義。施於文辭者。如是而在選。公卿大夫家之子弟。其勸耳矣。愈爲博士也。始事相公於祭酒。分教東都生也。事相公於東大學。今爲郎於都官也。又事相公於居守。三爲屬吏。經時五年。觀道德於前後。聽教誨於左右。可謂親薰而炙之矣。其高大遠密者。不敢隱度論也。其勤已務博施。以己之

有欲人之能不知古君子何如耳。今生始進仕。獲重語於天下。而慊慊若不足。真能守其家法矣。其在門者可進賀也。求告來寧。朝夕侍側。東都士大夫不得見其面。於其行日。分司吏與留守之從事。竊載酒肴。席定鼎門外。盛賓客以餞之。既醉。各爲詩五韻。且屬愈爲序。

【訓讀】秘書は御府なり。天子猶ほ以爲へらく、外にして且つ遠く、朝夕視ることを得ず、と。始めて更に書を集賢殿に聚めて、別に校讐の官を置く。曰く、學士、曰く校理、常に以て丞相を寵して大學士と爲す。その他の學士も、皆達官なり。校理は、天下の文學を能くするに名あるものを用ふ。苟くも、選に在れば、その秩次を計らず、惟だ之を用ふるところのままなり。これに由つて、集賢の書、盛に積み、秘書有るところを盡すも、その半に處ること能はず。書、日に益す多く、官、日に益す重し。四年、鄭生福、はじめて長安の尉を以て、選ばれて校理となる。人皆曰く、これ宰相の子、能く恭儉、教訓を守り、古義を好み、文辭に施すものなり。かくの如くして選に在り、公卿大夫の家の子弟、其れ勸めむのみ、と。愈の博士たるや、はじめて、相公に祭酒に事へ、東都生に分教せしとき、相公に東大學に事ふ。今、都官に即たるや、又相公に居守に事ふ。三たび屬吏となる、時を經ること五年、道德を前後に觀、教誨を左右に聽く、親しく薰して之に炙すといふべし。その高大遠密なるもの、敢て隱に度論せざるなり、その己を勤め、博く施すことを務め、己の有を以て人の能くせむことを欲する。古しへの君子も何如なるを知らざるのみ。今生、はじめて進仕して、重語を天下に獲たり、而かも慷慨として足らざるが若くす、真に能く其家法を守れり。その門に在るもの、進んで賀すべきなり。求め告げ、來事して、朝夕側に侍す。東都の士大夫、その面を見るを得ず。その行くの日に於て、分司の吏と留守の從事と、竊に酒肴を載せて、定鼎門外に席し、賓客を盛にして、以て之を餞す。すでに酔うて、各詩五韻を爲り、且つ愈に屬して序を爲らしむ。

相公倦台鼎。分正新邑洛。才子富文華。校讐天祿閣。壽觴嘉節過。歸騎春衫薄。鳥哢正交加。楊花共紛泊。親交誰不羨。去去翔寥廓。

相公、台鼎に倦んで、新邑洛に分正たり。

才子、文華に富み、天祿閣に校讐す。

壽觴、嘉節過ぎ、歸騎、春衫薄し。

鳥哢正に交加、楊花共に紛泊たり。

親交誰か羨まざらむ、去去寥廓に翔れ。

【字解】【一】相公、鄭餘慶を指す、即ち鄭校理の父。【二】倦、台鼎、宰相の職に居ること飽きた。【三】分正新邑洛、新邑洛は洛陽。安祿山の亂後、規度一變せしが故に、新邑といつたので、分司は即ち留守。唐書を見ると「元和元年、鄭餘慶、相を罷めて太

子賢等となり、國子祭酒に遷り、冬十一月庚戌、河南尹に遷り、三年夏六月甲戌、河南尹より東都留守に拜せられた、後六年十月、東都衛書に除せられ、その前後、韓愈も河南より京師に至り、七年二月、職方員外郎を以て復た國子博士となつた。【三】才子、鄭校理を云ふ。【四】校書、古書を校正すること。【五】天祿閣、三輔故事に「天祿閣は、大殿の北に在り、以て秘書を閣す」とあり、舊注に「天祿は、獸の名。漢時、この獸を買するものあり、因つて以て閣に名づけ、以て秘書を閣す」とある。漢代、初は未央宮に在つて、蕭何、これを造り、その中に秘書を藏し、賢才をして此に居らしめ、劉向なども、ここで古書を校正した。【六】鳥喙、鳥の喙く。【七】紛泊、亂れて飄泊する。【八】去去、去れ去れといつて相囑する辭。【九】鄭餘慶、漢書司馬相如傳に「鸛鶴、すてに鄭餘の字に類ける」とあり、文選謝朓の詩に寄言野鶴者、鄭餘已高翔とある、天上に飛翔せよといふ義。

【題義】鄭十の十は、例の排行、名は涵といひ、鄭餘慶の子である。書唐書鄭餘慶傳に「子涵、本名は涵、文宗藩邸の時の名同じきを以て、名を涵と改む。貞元十年、進士に擧げられ、父の誦官を以て累年仕へず、秘書省校書郎より、洛陽尉に遷り、集賢院修撰に充てられ、長安尉集賢校理に改めらる」とある。集賢院は、元の集賢殿で、唐書に「開元十三年、集賢殿を改めて、集賢殿となし、四部の書を其中に聚めて、修撰校理を置き、五品以上を學士となし、六品以下を直學士となし、宰相張説を以て大學士となす」とあつて、玄宗の時に始まつたのであるが、後には、學士の下に修撰校理等を置かれた。舊注に「公、元和四年六月を以て都官員外郎となり、東都に分司たり。涵、求め告げて來寧す。公、その行に於て、この序を作り、以て之を送る。蓋し五年の春なり、故に歸騎春衫薄の句あり」といつて居る。それから、例の如く序の大意を下に解説すると——秘書といふのは御府で、そこに歴代の

典籍が收容してあるが、天子は猶ほ懐らず思召され、何分宮外に在り、その上遠くて朝夕に其書を見る事が出來ず、まことに不便だといふので、はじめて、改めて書を宮中の集賢殿に聚め、別に校書官を置きて學士と稱し、校理と稱した。それから、常に宰相を尊寵する意味で、これを長官として、大學士と稱さしめ、その他の學士どもも、無論、皆立派な官職であるし、校理は、天下で文學を能くするといふ評判あるものを用ひた。苟くも其選に入りさへすれば、從來の秩祿位階の如何に關せず。隨意に之を擢用することになつて居る。かくて、集賢殿の書籍は、盛に堆積し、秘書に在るだけの者を盡しても、その半ばにも及ばぬ位、書は日にまし多くなり、官は日にまし重くなつた。元和四年、鄭涵といふ人は、はじめて、長安の尉から選ばれて、集賢校理となつた。そこで、皆皆評判して、鄭涵は、宰相鄭餘慶の子であつて、能く恭儉であり、家庭の教訓を守り、古い義理を探究することを好んで、これを文辭に施すものである。かういふ人を擢用すると、公卿大夫の家の子弟などの勳みにもなるから、まことに善いことであるといつた。私は、國子博士となつた時、鄭相公は國子祭酒、即ち大學總長であつたから、その下に隸屬し、次に洛陽の生徒に分教した時、相公は河南尹であつたから、その下に隸屬し、次は都官員外郎となつた時、相公は東都留守であつたから、その下に隸屬し、三たび、相公の屬吏となつて、五年の久しきを經過した。その間、相公の前後に在つて、その道徳を觀、相公の左右に在つて、その教誨を受け、取りも直さず、薰陶せられ且つ親炙して居たのである。相

公の高大遠密なる識見に就いては、敢て私に付度して議論するまでもなく、公然それを評論することも出来るし、相公が己を勤め、しかも博く他に施すことを務め、自分に材能があるから、他人も矢張、それ程の材能があつて欲しいといつて、後進の士を誘掖指導されることに就いては、古しへの君子も、かほどまでではあるまいと思はれる。その御子息たる鄭涵が、初めて進んで仕官し、そして、如上の好評を天下に得つつも、なほ慷慨として足らざるが如くし、セツセと勉強して居るのは、まことに能く其家法を守るものと申すべく、鄭氏の門に在る後進の吾吾どもは、進んで御喜を申すべき筈である。この度は、休暇を願つて、御親父の安否を問ふ爲に洛陽に來り、朝夕、その側に伏持されて居たが、洛陽の士大夫どもは、お目にかかることが出來ず、長安に歸る爲に出發せらるる其當日、大學分校の役人は、留守の從事等と共に、酒肴を載せ、定鼎門の外に席を設け、多勢寄り集まつて餞別を爲し、すでに酔ひし後、各、五韻の詩を作り、その上、予に命じて序を作らしめたから、下手ではあるが、この文を作つた——なほ題下の自注に「洛の字を得たり」とあるのを見ると、その時、分韻を爲したのである。

【詩意】鄭相公は、久しく宰相の位に居られたが、台鼎の重きに任ずることに飽きて、洛陽の留守となられた。その御子息たる鄭涵は、才子として世に知られ、文章風華に富み、集賢校理に任じ、古しへの天祿閣に比すべき祕府に出仕して、校讐に従事して居られる。今次、親を洛陽に省し、日ごとに

奉觴を薦められて居たが、花咲き匂ふ佳節は、いつしか過ぎ、再び長安に歸るといふので、春著の衣裳、いとも輕げに、馬に乗じて出立されむとして居る。今しも、鳥の聲は、交る鳴き合せ、柳の花は紛紛として亂れ飄り、旅行には持つて來いといふ晩春の好期節である。平生親交あるもの、君の出仕を見て羨ましく思はぬものは無い位。さらば、疾く此を去つて、彼の天上に比すべき朝廷に翱翔し、追追と出身されむことを囑望するの情に堪へぬ。

【餘論】この首は、席上の規定に従つて、矢張五韻、即ち十句で出來て居る。短い割合には、變化があつて面白く、その門地聲望より始め、今次洛陽に來寧せしことより、長安に還ることを敘し、そして、將來の榮達を囑望したのである。

送汴州監軍俱文珍 井序 汴州の監軍俱文珍を送る 井に序

今之天下之鎮、陳留爲大、屯兵十萬、連地四州、左淮右河、抱負齊楚、濁流浩浩、舟車所同、故自天寶已來、當藩垣屏翰之任、有弓矢鉄鉞之權、皆國之元臣、天子所左右、其監統中貴、必材雄德茂、榮耀寵光、能俯達人情、仰喻天意者、然後爲之、故我監軍俱公、輟侍從之榮、受腹心之寄、

奮其武毅。張我皇威。遇變出奇。先事獨運。偃息談笑。危疑以平。天子無東顧之憂。方伯有同和之美。十三年春。將如京師。相國隴西公。飲餞於青門之外。謂功德皆可歌之也。命其屬咸作詩以鋪繹之。詩曰。

【訓讀】今の天下の鎮、陳留を大なりとす。兵を屯すること十萬、地を連ぬること四州、淮を左にし、河を右にし、齊楚を抱負し、濁流浩浩として、舟車の同じうするところなり。故に天寶より已來、藩垣屏翰の任に當り、弓矢鉄鉞の權あり、皆國の元臣、天子の左右とするところなり。その監、中貴を統ぶ、必ず材雄に、德茂に、榮耀龍光、能く俯して人情に達し、仰いで天意を諭すものにして、然る後に之を爲す。故に我が監軍俱公、侍從の榮を輟め、腹心の寄を受け、その武毅を奮ひ、我が皇威を張り、變に遇うて奇を出し、事に先つて獨り運す。偃息談笑、危疑以て平かなり。天子、東顧の憂なく、方伯、同和の美あり、十三年春、將に京師に如かむとす。相國隴西公、青門の外に飲餞す。謂ふ、功德皆之を歌ふべきなりと。その屬に命じて、咸な詩を作つて、以て之を鋪繹せしむ。詩に曰く、

奉使羌池靜。臨戎汴水安。使に奉じて、羌池靜に、戎に臨んで汴水安し。  
冲天鵬翅闊。報國劍鉞寒。天に沖して鵬翅闊く、國に報いて劍鉞寒し。

曉日驅征騎。春風詠采蘭。曉日、征騎を驅り、春風、采蘭を詠す。  
誰言臣子道。忠孝兩全難。誰か言ふ臣子の道、忠孝兩全難しと。

【字解】【一】奉使羌池靜 俱文珍が曩に使を奉じて西邊に使すると、その地が平靜に成つたといふこと。舊唐書の本傳は極めて簡單で、その出身の次第さへ疎略書いて無いから、詳しいことは分からぬ。【二】臨戎汴水安 俱文珍が監軍となつて汴州に在官せしことを云ふ。【三】劍鉞 鉞は刀の先端。【四】采蘭 文選東晉補亡時に晉被南陽言采三其蘭とあつて、李善注に「蘭に覆つて以て香草を採るは、以て其父母に供養せむとす」とある。

【題義】 蔣注に「隴西公董晉、汴州陳留郡節度使となつて、汴州に治す。中常侍俱文珍、監軍たり。公、觀察推官たり。文珍、將に京師に如かむとす、序詩を作り、以て之を送る、時に貞元十三年なり」とある。それから、序に云ふところは——今日天下の藩鎮の中では、陳留が一番大きく、兵を屯すること十萬、地は汴州毫穎の四州を連ね、淮水を左にし、黃河を右にし、齊を抱き、楚を負ひ、二水は濁流浩浩として、舟は水中を行き、車は岸上を通り、まことに、四方必衝の要害になつて居る。されば、天寶安史の亂より以來、藩屏の重任に當り。兵馬を統轄し、鉄鉞を授けられて、その地の節度使となつたものは、いづれ、國家の元老で、天子が左右とせられるところの人人であつた。そして、その監軍たるものは、中貴、即ち宦官輩を統御し、必ず材力雄に、德望茂く、榮耀龍光を受け、俯しては人情に達し、仰いで天意を諭す者にして、はじめて就任することが出来る。我が監軍俱公文



珍は、侍従の榮職を止め、腹心の重寄を受けて、この郡に監軍となり、その武教を奮ひ、我が皇威を張り、變事に遇へば、奇策を出し、事の起る前に、獨り其處置をなし、毎毎のんきさうに休息しつつ譏笑して居られたから、下民一般、危疑の念は、いつしか平かになつて騷擾などは、決して起らず、その爲に、天子は東顧の憂なく、一方の旗頭たる面々は、同心和協の美を成すに至つた。ここに、貞元十三年の春、俱公は、事を以て長安に上京せむとし、相國隔西公董晉は、青門の外に餞別の筵を設けて酒を置いた。そして、俱公從前の功德は、皆歌ふべきものであるといふので、その屬僚に命じ、各詩を作つて、その功德を鋪張尋釋せしめた。そこで、予も亦た詩を作つたが、即ち左の通りである。

【詩意】俱公は、曩に使命を奉じて、西邊羌族の住んで居る地方に赴き、見事に之を平定したが、今回、藩鎮の兵を撫御し、汴水一帶の地方が安靜になつた。俱公の志氣は、鵬が闊い翅を廣げて、天に冲するが如く、そして、國家に報いむが爲に、切ッ先の寒げに見ゆる劍を平生佩用して居られる。今次、長安に赴いて、天子への忠勤を勵む爲に、征騎を驅つて發足されたが、都に著するは、春の盛りで、關を探ることを詠じて、親を養ふ至情をも盡されるであらう。臣子の道、忠ならむと欲すれば孝ならず、孝ならむと欲すれば忠ならず、兩つながら全うすることは六つかしいといふが、わが俱公に於ては、決して、さういふことは無い。

【餘論】奉使の二句は俱公の經歷、冲天の二句は俱公の志氣、晩日の二句は今次長安に行くことを忠孝兩面に繋げ、そして、七八で之を收結して居るので、その結構は極めて緊密である。樊汝霖は「この序正集に入らず、李漢、文珍の故を以て公の爲に諱むか」といつたが、これが普通の宦官ならば兎に角、俱文珍に於ては、決して諱む必要はない。舊唐書の本傳に據れば、後に順宗即位。二王の徒が類りに權勢を振つた時、俱文珍は、姓名を改めて劉貞亮といつて居たが、ひとり之に對抗し、遂に順宗に勸めて廣陵王を太子とし、やがて即位したのが憲宗で、遂に二王の一黨を追ひ斥けたから、時議、貞亮の忠蓋を嘉し、仍つて、累遷して右衛大將軍知内侍省事となり、元和八年に卒した時、憲宗は、その朝戴の功を思つて、開府儀同三司を贈られたとのことである。かばかりの人物なれば、たとひ中貴であつた處が、累と爲すに足らず、從つて、樊汝霖の此言は、未だ其當を得ざるものと云はねばならぬ。

石鼎聯句詩 井序 石鼎聯句の詩 井に序

元和七年十二月四日衡山道士軒轅彌明自衡下來舊與劉師服進士衡湘中相識將過太白知師服在京夜抵其居宿有校書郎侯喜新

有能詩聲。夜與劉說詩。彌明在其側。貌極醜。白鬚黑面。長頸而高結。喉中又作楚語。喜視之。若無人。彌明忽軒衣張眉。指罍中石鼎。謂喜曰。子云能詩。能與我賦。此乎。劉往見衡湘間人說。云。年九十餘矣。解捕逐鬼物。拘囚蛟螭虎豹。不知其實能否也。見其老。頗貌敬之。不知其有文也。聞此說。大喜。即援筆題其首兩句。次傳於喜。喜踊躍。即綴其下。云。道士啞然笑曰。子詩如是而已乎。即袖手竦肩。倚北牆坐。謂劉曰。吾不解世俗書。子爲我書。因高吟曰。龍頭縮菌蝨。豕腹漲彭亨。初不似經意。詩旨有似譏喜。二子相顧慚駭。欲以多窮之。即又爲而傳之。喜喜益苦。務欲壓道士。每營度欲出口。吻聲鳴益悲。操筆欲書。將下復止。竟亦不能奇也。畢。即傳道士。道士高踞大唱曰。劉把筆。吾詩云云。其不用意。而功益奇。不可附說。語皆侵劉侯。喜益忌之。劉與侯皆已賦十餘韻。彌明應之如響。皆穎脫含譏諷。夜盡三更。二子思竭不能續。因起謝曰。尊師非世人也。某伏矣。願爲弟子。不敢更論詩。道士奮曰。不然。章不可以不

成也。又謂劉曰。把筆來。吾與汝就之。即又唱出四十字爲八句。書訖使讀。讀畢謂二子曰。章不已就乎。二子齊應曰。就矣。道士曰。子皆不足與語。此寧爲文耶。吾就子所能而作耳。非吾之所學於師而能者也。吾所能者。子皆不足以聞也。獨文乎哉。吾語亦不當聞也。吾閉口矣。二子大懼。皆起立牀下拜曰。不敢他有問也。願聞一言而已。先生稱吾不解人間書。敢問解何書。請問此而已。道士寂然若無聞也。累問不應。二子不自得。即退就座。道士倚牆睡。鼻息如雷鳴。二子怛然失色。不敢喘。斯須曙鼓鼕鼕。二子亦困。遂坐睡。及覺日已上。驚顧覓道士不見。即問童奴。奴曰。天且明。道士起出門。若將便旋然。奴怪久不返。即出到門覓。無有也。二子驚惋自責。若有失者。問遂詣余言。余不能識其何道士也。嘗聞有隱君子彌明。豈其人耶。韓愈序。

【訓讀】元和七年十二月四日、衡山の道士軒轅彌明、衡より下り來る。奮と劉師服進士と衡湘中に相識る。將に太白を過ぎむとし、師服の京に在るを知り、夜、その居に抵つて宿す。校書郎侯喜あり、新

に詩を能くするの聲あり、夜、劉と詩を説く。彌明、その側に在り、貌極めて醜、白鬚黒面、長頸にして高結、喉中、又楚語を作す。喜、これを視て、人なきが若し。彌明、忽ち衣を軒げ、眉を張り、爐中の石鼎を指し、喜に謂つて曰く、子、詩を能くすと云ふ、能く我と此を賦せむやと。劉、往に衡湘の間の人の説くを見る。云ふ、年九十餘、鬼物を捕逐し、蛟龍虎豹を拘囚するを解すと、その實に能くするや否やを知らざるなり。その老を見て、頗る之を敬す。その文あるを知らざるなり、この説を聞いて、大に喜び、即ち筆を授り、その首兩句を題して次に喜に傳ふ。喜、踊躍して、即ち其下に綴ぬ、云云と。道士亞然として笑つて曰く、子の詩、かくの如きのみかと。即ち手を袖にし、肩を辣かし、北牆に倚つて坐し、劉に謂つて曰く、吾、世俗の書を解せず、子、我が爲に書せよと、因つて高吟して曰く、龍頭縮三齒、豕腹漲三彭亨と。初めより、意を經るに似ず。詩旨、喜を護るに似たるあり、二子相顧みて慚駭し、多きを以て之を窮めむと欲し、即ち又爲つて之を喜に傳ふ。喜、思益す苦、務めて道士を壓せむと欲し、營度して口吻より出さむと欲する毎に、聲の鳴ること益す悲む。筆を操つて、書せむと欲し、將に下さむとして復た止み、竟に亦た奇なること能はざるなり。擧つて、即ち道士に傳ふ。道士高く踞して大に唱へて曰く、劉、筆を把れ、吾が詩云云と。それ意を用ひざるも、しかも功益す奇なり、附説すべからず、語、皆劉侯を侵す。喜、益す之を忌む。劉と侯と、皆すでに十餘韻を賦す。彌明、これに應ずること響の如く、皆頰脫にして譏諷を含めり。夜三更を盡すとき、

二子思竭きて、續ぐこと能はず。因つて起つて謝して曰く、尊師は世人に非ざるなり。某、伏せり、願はくは、弟子とならむ、敢て更に詩を論せずと。道士奮つて曰く、然らず、章以て成さずむばあるべからざるなりと。又劉に謂つて曰く、筆を把り來れ、吾、汝と之を就さむと。即ち又四十字を唱出して八句と爲し、書し訖りて讀ましむ、讀み畢つて、二子に謂つて曰く、章、すでに就らずやと。二子齊しく應へて曰く、就れり。道士曰く、子、皆與に語るに足らず、これ寧ろ文と爲さむや、吾、子の能くするところに就いて作るのみ、吾が師に學んで能くするところのものに非ざるなり、吾が能くするところのものは、子皆以て聞くに足らざるなり、獨り文のみならむや、吾が語も亦た當に聞くべからざるなり、吾、口を閉ぢむと。二子大に懼れて、皆起ち、牀下に立つて拜して曰く、敢て他に問ふあるにあらざるなり、願はくは、一言を聞かむのみ。先生稱す、吾、人間の書を解せずと、敢て問ふ何の書を解するか。請ふ、此を問はむのみと。道士、寂然として聞くなきが若きなり、累りに問へども應へず、二子、自得せず、即ち退いて座に就く、道士、牆に倚つて睡り、鼻息、雷の鳴るが如し。二子、怛然として色を失ひ、敢て喘がす。斯須にして、曙鼓動いて鼕鼕たり。二子、亦た困んで遂に坐睡す。覺むるに及びて、日、すでに上る。驚き顧みて、道士を覺るに見えず、即ち童奴に問ふ。奴曰く、天、且に明けむとす、道士、起つて門を出で、將に便施せむとするが若く然り。奴久しく返らざるを怪んで、即ち出でて、門に到つて覺るに、有ることなきなり。二子驚惋して自ら責め失ふある

もの若し。しばらくありて、遂に余に詣りて言ふ、余、その何の道士たるかを識ること能はざるなり。かつて聞く、隱君子彌明ありと、豈に其人か。韓愈序す。

巧匠斲山骨、剝中事煎烹。師服

直柄未當權、塞口且吞聲。喜

龍頭縮菌蠢、豕腹漲彭亨。彌明

外苞乾蘚文、中有暗浪驚。師服

在冷足自安、遭焚意彌貞。喜

謬當鼎鼐間、妄使水火爭。彌明

大似烈士膽、圓如戰馬纓。師服

上比香爐尖、下與鏡面平。喜

秋瓜未落蒂、凍芋強抽萌。彌明

一塊元氣閉、細泉幽竇傾。師服

不值輪寫處、焉知懷抱清。喜

方當洪爐然、益見小器盈。彌明

峴峴無刃迹、團團類天成。師服

遙疑龜負圖、出曝曉正晴。喜

旁有雙耳穿、上爲孤髻撐。彌明

或訝短尾銚、又似無足鎗。師服

可惜寒食毬、擲此傍路坑。喜

何當出灰炆、無計離餅罌。彌明

陋質荷斟酌、狹中愧提擎。師服

豈能羨仙藥、但未汗羊羹。喜

形模婦女笑、度量兒童輕。彌明

徒示堅重性、不過升合盛。師服

旁似廢穀仰、側見折軸橫。喜

時於蚯蚓竅、微作蒼蠅鳴。彌明

方に洪爐の然ゆるに當つて、益す小器の盈つるを見る。

峴峴として刃迹なく、團團として天成に類す。『曝す。

遙に疑ふ龜の圖を負うて、出でて曉の正に晒れたるに。

旁に雙耳の穿てるあり、上に孤髻の撐ふるを爲す。

或は短尾の銚かと訝かり、又無足の鎗に似たり。

惜むべし、寒食の毬、この傍路の坑に擲つことを。

何ぞ當に灰炆を出づべき、餅罌を離るるに計なし。

陋質、斟酌を荷ひ、狹中、提擎を愧づ。

豈に能く仙藥を煮むや、但未だ羊羹に汗されず。

形模、婦女笑ひ、度量、兒童輕んず。『横はるを見。

徒に堅重の性を示すも、升合を盛るに過ぎず。

旁よりすれば廢穀の仰ぐに似たり、側つては折軸の。

時に蚯蚓の竅に於て、微に蒼蠅の鳴を作す。

以茲翻溢愆。實負任使誠。師服常居願。眴地敢有漏洩情。喜寧依暖熱弊。不與寒涼并。彌明區區徒自效。瑣瑣不足呈。喜迴旋但兀兀。開闔惟鏗鏗。師服全勝瑚璉貴。空有口傳名。豈比俎豆古。不爲手所撻。磨碧去圭角。浸潤著光精。願君莫嘲諷。此物方施行。彌明願はくは、君、嘲諷する莫れ、この物、方に施行す。

【字解】【一】巧匠 上手な細工人。【二】山骨 石をいふ。【三】刺中 中央を刺める。【四】直柄 柄は鼎の主體より上の突起した部分。【五】未嘗 推測に代用することは出来ぬ。【六】龍頭 これは脚部で、そこに龍の頭を彫刻してある。【七】商器 文選南都賦に芝房商器生其隈とあつて、鼓んでちぢれる。【八】系腹 これは主部、即ち物を盛る處で、系の腹の如く肥大である。【九】滂影 滂は腹に同じ、影は、張り切つた腹。【一〇】乾辭文 乾燥した苔の模様。【一一】足自安 足は鼎の脚部。【一二】鼎脚 鼎は鼎の小なるもの。【一三】戰馬 腰は首に掛けた鞍で、戰馬が走る時に固くなつて見えるより云ふ。【一四】下典 典面平

下は鼎の主部の裏面。【一五】輪寫 水を注いで移す。【一六】洪爐 大きな圍爐。【一七】饒饒 莊子に「饒饒然として鑪箑の間に在り」とあつて、その注に「視る貌」とある。【一八】龜負圖 禹の時、龜が圖を負うて黃河から出て来た。【一九】雙耳 鼎の主部の兩側を持つ處のあるをいふ、即ち取ツ手。【二〇】孤帶 帶のつかへて居る様である。【二一】短尾 饒は饒子、小さい釜で柄が付いて居るし、又口がある。短尾は柄の短きをいふ。【二二】無足 饒は饒、あしがなへ、釜の腹、三つの短い足があつて酒を温むるに用ふ、その足の極めて短く殆んど無いと同じ様になつて居る種類。【二三】寒食 寒食の日に圓輪の遊戯に用ふる種、前に卷九寒食直歸過雨の詩の不見紅粧上の句下に解釋して置いた。【二四】灰池 池は燻爐、即ち燈火の燃えさし。【二五】餅 餅、ともに饒。【二六】狹中 その内部の狭小なるをいふ。【二七】羊羹 羊の肝を集めて煮詰めるので、精力を増す效があるといふ。その色は赤い。日本の菓子羊羹は、その色の似たるより名づけたものであらう。【二八】升合盛 升合を盛るだけで、とても何斗といふ様に多くは遣入らぬ。【二九】旁 横から見ると。【三〇】磨穀 車の心棒の破損して役に立たぬもの。【三一】側 横つ倒しになる。【三二】盤 盤、盤の出入する様な小さな隙間。【三三】翻溢 あまり水を多く入れてこぼれる。【三四】任使 命ぜられ使はれる。【三五】煎茶 煎茶のふりがへつて加減する地位。【三六】迴旋 ぐるぐる廻して見ても、どちらから眺めても。【三七】瑚璉 廟堂の祭器。【三八】俎豆 祭禮の時に供物を盛る器。【三九】投 博雅に「投は投なり」とあり、淮南子に「子路爾を投げて牛爾を受く」とあつて、その注に「投は擲なり」とある。【四〇】磨碧 二字ともに磨く。【四一】浸潤 自然と内部から湯垢が浸み込む。【四二】施行 賞用に供する。

【題義】石鼎聯句の由來に就いては、韓愈の序が之を詳にして居るから、ここに述べる必要もない。なほ其聯句の主唱者たる軒轅彌明といへる老道士は、實に韓愈の假稱であるといふことが、むかしから信せられて居るが、これに就いては、餘論に於て考覈することにする。それから、この聯句は、序に元和七年十二月とあるから、韓愈が再び國子博士に在職して、ひまであつた時分の事で、その明年三

月には、比部郎中史館修撰に改められた。そこで、序文の大意はといふと——元和七年十二月四日に、衡山の道士軒轅彌明といふものが、山麓の幽栖を出でて著京した。この人は、もと進士劉師服が衡湘の地に居た時分から知り合つて居たから、今次、西の方、太白に往かうといふので、此に來り、丁度師服が在京することを知つて、夜、その家を尋ねて泊まり込んだ。ここに校書郎侯喜といふものがあつて、近ごろ、詩が上手だといふ評判を得たが、夜、劉師服を訪うて、詩の話をして居た。その時、彌明は其側に居たが、容貌極めて醜惡、白い鬚、黒い面、長い頸で、喉佛の高くなつた處から、楚地の訛を出して話をする。侯喜は之を注視して居たが、格別氣にも留めずに居ると、彌明は、のけ者にされたのが不平であつたものと見え、忽ち衣を捲くり上げ、眉を張りつつ、爐中の石鼎を指して、侯喜に向ひ「貴公は、詩が上手だといふが、我と共に聯句をして、この石鼎を賦すか如何だ」といつた。さきに、劉師服は、衡湘地方の人の話を聞いたことがあるが、この道士は、年九十餘、しかも通力があつて、鬼物を捕へたり追ひ拂つたりし、蛟螭虎豹を拘禁囚繫する術を會得して居るといつたが、實際、そんな事を能くするや否やは知らず、唯だその年老いたるを見て、餘程表面的に崇敬して居た。又その人に文事の心得があるといふことを知らなかつたが、今彌明親らく言ひ出せしことを聞いて、大に喜び、即坐に筆を把つて、最初の二句を作り、次に之を侯喜に渡すと、侯喜は踊つて大に喜び、待つて居ましたと云はぬばかり、直に其下に云々と續けた。すると、道士は噤然として大笑し「貴公

の詩は、これ丈の事か」といひ、直に手を袖に入れ、肩を聳かし、北側の衝立に倚つて坐し、劉師服を顧みて「乃公は、世俗の書體を知らない、貴公、代つて書いて呉れろ」といつて、龍頭縮菌蠶、豕腹漲彭亨と高吟したが、初めから、格別考へもせぬやうであつて、その意味は、どうやら、侯喜の詩名あつて其實未だ相副はざるを譏るやうであつた。侯劉二子は、相顧みて慙愧し、これは句數を多くして困らせて遣らうといふので、直に其後を作つて、侯喜に渡すと、侯喜は、詩思益す苦んだが、務めて道士を壓服して呉れやうといふので、經營量度して、口吻から唱へ出さうとする毎に、その聲は益す悲しげに聞こえ、筆を執つて書かうとして復た中止し、いかにしても奇句を拈り出すことが出来なかつた。そこで、侯喜が擧つて道士に渡すと、道士は高胡坐をかきながら、大聲に呼ばはつて「劉君、筆を持って、吾が句は云云だ」といひ、少しも意を用ひずして、直に打ち出したが、その功力は益す奇であつて、ここに附説することも出来ぬ位、そして、その語は、劉侯二人にあて付けてあつたから、侯喜は愈よ忌忌しく思つて、やがて劉師服と二人で、各すでに十餘韻を賦したが、彌明が之に應じて、その後の句を作ることは、さながら響の聲に隨ふが如く、いづれも、雖が囊中より穎脱して、ちくちくと刺すが如く、譏り嘲る意味を含んで居た。かくて、夜は三更を過ぎ、二人ともに考へが盡きて、後を續けることが出来なくなつたから、乃ち起つて、蹣んで挨拶を爲し、尊師は到底世間並の御方ではない、某等は恐れ入りました。願はくは、弟子となつて、教を受けたい。今後高慢らしく詩を論ず

ることは致しませぬ」といつた。すると、道士は、奮然として、いや左様では御坐らぬ、何は鬼もあれ、折角遣りかけたものだから、これは是非まとめなければ成らぬといひ、又劉師服に向つて「筆を持つて来い、乃公は、汝の爲に之をまとめて遣はさう」といひ、即座に四十字を唱へ出して八句となし、やがて、それを書き訖ると、二人に命じて讀ましめ、讀み畢ると、二人に向つて「どうだ、これで愈よまとまつたではないか」といふと、二人は聲を揃へて「いかにも、まとまりました」といつた。すると、道士は、「こんなのは、話にも成らないので、文といはれるものではない、吾は、しばらく貴公等の出来る範圍に就いて作つたので、吾が師に學んで能くするところは、こんなものではない。しかし、吾が能くするところは、貴公達に聞かせても、分らないから仕方がない。ひとり、文ばかりではない、わが話としても聞き取ること出来まいから、乃公は口を閉ぢて、何も申さぬぞ」といつた。二人は、大に懼れ、皆皆牀下に起立して拜を爲し、「外の事は承はらないでも宜しいが、ただ一言お聞き申したい。さきに、先生は、自分は、人間なみの書體を知らぬと仰せられたが、然らば、如何なる書體を解されるか、それを承はりたい」といつたが、道士は、寂然として聞かぬかの如く、つづけて問ふたけれども、返事もしない。二人は、不満足ではあるが、仕方がないから、退いて、おのが座に就くと、道士は平氣で、例の衝立に倚りかかつた儘、睡つたが、その躰は、さながら雷の鳴るが如くであつた。二人は、怛然として色を失ひ、敢て喘ぎもせず、息を凝らして見て居たが、しばらくし

て、曉の街鼓が響き、二人とも、疲れはてて、遂に坐睡りをした。やがて、目が覺めると、太陽は、すでに上つて居たから、大に驚き、顧みて道士を捜したが見つからない。そこで、下部の小童に問ふと、小童が答へて云ふには、「夜の明けむとする頃、道士は、身を起して、門を出て往つたが、すぐに戻つて来さうな様子であつた。しかし、久くして返らぬから、變だと思つて、早速ここより出て、門まで往つて探したが、影だに見えませぬ」といつた。二人は驚愕して、自ら手ぬかりを責め、茫然として自失したやうであつた。しばらくして、余の處に来て、その話をした。余は、その人が如何なる道士かを識別することは出来ない。但し、隱君子で彌明と名乗るものがあるといふことを聞いて居たが、てつきり、その人ではあるまいか、そこで、二人の話を其儘書いて、それを序にする——その聯句といふのは、即ち次の如くである。

【詩意】世に上手といはれる細工人が、山の骨とも稱すべき石を削り、その中を窪めて、鼎の形をなし、それで、物を煮る用に供した。その柄は眞直に伸ばしてあるが、權衡に代用することも出来ず、口には蓋をして、聲を出させぬ様にしてある。眞中には、龍頭の彫刻があるが、縮まつて、皺が寄つて居るし、主部は、豕の腹の如く、脹れて彭亨として居る。その外面は、乾いた苔の模様に入れ、中には水を入れて、暗浪が騒いで居る。その冷かな時分に、鼎の足は、もとより確ツかりして居るが、下から火を焚かれて、その意、愈よ眞、決して移變することはない。誤つて、その形を大小の鼎

の中間に置いたから、まことに使ひ善いものとして、妄りに水火を調はしめる様なことになつた。その石鼎の大きさは、烈士の膽程であるし、その圓さ加減は、駢ける時に戰馬の紐が輪を爲す位である。上の方は、香爐の様に尖つて居るし、下なる裏面は、鏡の如く平かである。全體の形は、秋の瓜が未だ蒂を落さざるが如く、凍れる芋魁が無理に芽を出した様である。この鼎は、もと一塊の石でありながら、その中に元氣を閉ち、そして、幽深なる穴から湧いた細泉の水を満たしたので、その移して注ぐ處を見なければ、どうして、鼎その物の懐抱の薩張りと綺麗なことを知られやうか。その大きな圓爐裏の中で火の燃ゆる時に當つて、小器たる石鼎の内では、水が熱せられた爲に、分量が殖えて、中に一ぱいに成つて居る。その時、ちツと石鼎を眺めると、いかにも手際よく出来て居て、刃で削つた跡もなく、團圓として天然に渾成したやうである。遙に見れば、龜が圖を負うて河の中から這ひ出で、曉の晴れたるに乗じて、その脊を乾して居るやうであり、その旁に取ツ手が付いて居るが、上に向つて鬚の支へた様である。或は、柄の短い銚子の如く、足の無い鍋の如く、寒食の日、遊戯に用ふる毬が、惜むらくは、路に沿へる坑の中に棄てられたと思ふばかりである。石鼎は、決して灰や燃えさしの中から脱出することなく、又その用は餅器と同じである。もと石で造つたので、賤しい物であるのに、わざと斟酌して、特に此座敷に持つて來られたのは、有り難いが、中が狭くて、水が澤山這入らず、或は役に立たぬ場合があつて、提挈を愧づることもある。もとより仙藥を煮られることはないが、

羊羹に汗されることもない。その形貌が奇妙だといつて、婦女輩は笑ひ、その這入る量の少いことに就いて、兒童が輕んじて居る。いたづらに堅く重い特性を示して居るが、盛るところは、わづか升合に過ぎぬ。傍から見ると、車の轂の破損したやうであるし、側つて居る時には、折れた軸が横はつて居る如くである。時たま蚯蚓の出入しさうな細い隙間から蒸氣を吐いて、蟬の鳴く様な聲をなして居る。もし溢れて灰神樂を起したならば、それを扱ふ人の誠意に背くことになる。常に人から注意して顧眄される地位に居るが、本來は、機密を漏洩する様な私情は、少しもない。たとひ、暖熱の爲に使ひ古されるときも、寒涼には一向關係ない。區區として、おのが職務だけは全うして居るが、もとより瑣瑣たることであつて、格別見せつけて獻呈するだけのものでもない。いくら廻して見ても同じ形で、元元として居るし、蓋を明けたり閉ちたりすれば、鏗鏗たる音を爲すだけである。その用途から云へば、瑚璉の貴きにも勝つて居るが、唯だ萬口に其名を傳ふるだけで、格別尊崇されることもなく、俎豆の祭器の古びたるとは異にして、何にしても重いから、一寸手で舉げるといふことは出来ぬ。そこで、磨いて圭角を去り、内部から湯垢が浸みると、澤が出て来る。たとひ立派ではなくとも、願はくは、君、嘲つたり諒つたりするな。現に此物を使用して居て、その役に立つところが尊いのである。【餘論】詰まらぬものだが、石鼎は、形狀奇古にして、兎に角、役に立つといふことを形容し敘述したので、その間、作者は、他に對して嘲けつたり、からかつたりして居るから、その名を見て篇と考へれ



ば、大抵は分かる。しかし、これを一篇の詩として見ると、章法參差、語意重複を免れないので、たとへば、俳諧の附合の如く、その句から句に移る處に、特殊の興味は有るが、全體としては支離滅裂で、前に出て居る韓孟の聯句の、宛ら一手に出でたるが如きものとは、大に其趣を異にして居る。蔣注に「張文潛の本校、この本と特に異なり、蓋し蔡文忠に本づくなり、然れども、増損太だ多し、何の本に得たるかを知らず」とあり、又「これ特に文を以て滑稽とし、殊に風致の采るべきなし、宜しく外集に入るべし、一本に此篇なし、極めて體を得たり」といつて居る。それから、軒輅彌明が韓愈の假名なりや否やに就いて、洪興祖は「石鼎聯句の詩、或は云ふ、皆退之の作るところと、是れ然らず、劉侯、皆公の門人なり」と雖も、應に譏誚輕薄、かくの如きの甚しかるべからず、且つ彌明の貌極めて醜なるを序す、豈に亦た退之自ら謂はむや。予が同年李道立云ふ、かつて唐人作るところの買島の碣を見るに、云ふ、石鼎聯句に稱するところの軒輅彌明は、即ち君なりと。島は范陽の人、彌明は衡山の人、島は本と浮屠にして、彌明は道士、附會の妄信すべきものなし。ひとり、仙傳拾遺に彌明の傳あり、退之の語を祖述すと雖も、亦た必ず是人あらむ。聯句、若し以て公の作と爲さば、一口に出づるが若くならむ。今その劉侯の句を讀むに、彌明に及ばざること遠き甚し、何ぞ是に至らむや。蓋し聞く、君子は己を損して以て人の美を成す、未だ人を抑へて以て勝を取るを聞かざるなり」といひ、一應尤もらしいが、韓愈が假りに軒輅彌明と稱し、實際劉侯二人と聯句をなし、そして、し

らばくれて序文を草し、世人をかついだものとすれば、何でもないので、元と元と、遊戯の閒文字であるから、劉侯二人を譏つた處で、おのが容貌を醜惡に形容した處で、少しも、不思議はない。要するに、洪興祖は、頭から遊戯の文字といふことに想及せず、四角張つた議論をして居るから、事が面倒になる。これに較べると、朱子などは、流石に捌けたもので、「この詩の句法、全く韓公に類す、而して、或者の謂はゆる公の姓名を寓するものなり。蓋し、軒輅の反切は韓に近く、彌の字の義、又愈の字と相類す。即ち張籍の譏るところ、人と無實駁雜の説を爲すものなり。故に竊に意ふ、或者の言、是に近し。洪氏の疑ふところ、容貌聲音の陋は、乃ち故らに幻語を爲り、以て笑讎を資け、又以て其事實を亂し、讀者をして之を覺らざらしむるのみ。列仙傳の如きは、又好事者、この序に因つて、これに附著す、尤も以て據となすに足らざるなり」といつて居て、大に我が論旨を助け、且つ若干の辨證をも提供したものである。然るに、焦竑は「退之の石鼎聯句の詩に道士軒輅彌明あり、その語、往往にして高古羣を出づ。或者は謂ふ、即ち退之の撰するところにして、特に彌明に託言するのみと。今按ずるに、張南軒、淳熙の間、靜江に守たり、奏疏に曰ふあり、臣の領するところの州に、唐帝祠あり、城を去ること二十里にして近し。その山を堯山といふ、高廣にして一境の望たり。祠は始まることを詳にせずと雖も、然れども、唐の衡岳道士彌明の詩刻ありと。これに據るときは、石鼎聯句は、その人なしといふを得むや」といつて居るが、謂はゆる詩刻は、多分後人が軒輅彌明を實在の人

として捏造したもの過ぎざるべく、殊に張南軒の如き道學先生には、例の遊戯文字の事など、分かつらう筈がなく、折角ながら、この例證は、決して、有力なる者に非ざるを遺憾とする。

### 韓昌黎集終

### 韓昌黎詩年譜

韓文、即ち韓愈の詩文全集は、元と李漢の編次に係るものであるが、詩の部分は、手當り次第に掻き集めたものと見え、編年でもなく、分類でもなく、絶えて定準の認むべきものあらず、その中の數卷は、殊に蕪雜極まるものである。そこで、予が講説に於ては、各詩に就いて、一一、その年代を考數したが、ここでは、年譜として、全體を年月順に排列して見ることにした。彼の作詩を透して、韓愈の閱歴を研究しやうといふ様な場合には、些かながら、参考に成ることと思ふ。主として、参考に供したのは、顧嗣立の集注本の前に冕した昌黎年譜、方成珪の韓文箋正の後に附けた昌黎先生詩文年譜の二種であつて、往往私見を以て、先後入れ替へた處などがある。又講説中に述べたことと一致しないこともあらうが、それは新に研究した結果を年譜に編成したのだから、しばらく、後者を以て定説として貰ひたい。しかし、一時の間に合せに、大急ぎで作つたものであるから、もとより、挂漏あるを免れず、その完全なものは、更に他日を待つ外なく、仍つて、大方の是正を切望する次第である。

唐代宗大歷三年戊申 一歲。韓愈生。字退之。

大歷四年己酉 二歲。

大歷五年庚戌 三歲。父母喪。孤。兄會養之。

大歷六年辛亥 四歲。

大歷七年壬子 五歲。

大歷八年癸丑 六歲。

大歷九年甲寅 七歲。兄會從。洛去。秦地在。學好。他生習。記。

大歷十年乙卯 八歲。

大歷十一年丙辰 九歲。

大歷十二年丁巳 十歲。

大歷十三年戊午 十一歲。前年。兄居舍人韓會。元載坐。官貶。此年。韶州至。

大歷十四年己未 十二歲。

德宗建中元年庚申 十三歲。文能。

愈。これに従ふ。

建中二年辛酉 十四歲。

建中三年壬戌 十五歲。韓會貶所。歿。一家移。嵩居。

贈河陽李大夫(補遺).....下卷 六〇五頁

建中四年癸亥 十六歲。

興元元年甲子 十七歲。

貞元元年乙丑 十八歲。中原多故。以。地河南。避。嫂氏居。

貞元二年丙寅 十九歲。

出門(卷二).....上卷 三三八頁

貞元三年丁卯 二十歲。

烽火(卷二).....上卷 三四六頁

貞元四年戊辰 二十一歲。

貞元五年己巳 二十二歲。

貞元六年庚午 二十三歲。

貞元七年辛未 二十四歲。

落葉一首。送陳羽(卷二).....

上卷 二一六頁

貞元八年壬申 二十五歲。

陸贄、主司として、明水賦・御溝新柳詩を試む。愈、第に春宮に擢んでらる

北極一首。贈李觀(卷二).....

上卷 一九一頁

貞元九年癸酉 二十六歲。

博學宏詞科に試みられしが第せず。

貞元十年甲戌 二十七歲。

河陽に還りて墳墓を省す。

重雲一首。李觀疾贈之(卷二).....

上卷 一七九頁

謝自然詩(卷一).....

上卷 一二四頁

貞元十一年乙亥 二十八歲。

五月、潼關を出でて東歸し、二鳥賦を作る。九月、東京に之かむとし、

途、田横の墓下に出づ。

馬厭穀(卷二).....

上卷 三三六頁

岐山下。一首(卷二).....

上卷 一八六頁

長安交游者一首。贈孟郊(卷二).....

上卷 一八五頁

孟生詩(卷五).....

上卷 七三五頁

貞元十二年丙子 二十九歲。

董晉に擧げられて、秋、汴州觀察推官となる。

利劍(卷二).....

上卷 三五二頁

貞元十三年丁丑 三十歲。

送汴州監軍俱文珍(補遺).....

下卷 六八三頁

貞元十四年戊寅 三十一歲。

天星。送楊凝郎中賀正(卷三).....

上卷 三六八頁

古風(卷二).....

上卷 三二八頁

貞元十五年己卯 三十二歲。

二月、董晉薨す。喪を護して京師に至る。四日にして汴州亂れ、留後陸

長源殺さる。その秋、徐州に赴きて、張建封に依り、節度推官となりしが、意を得ず。

汴州亂。二一首(卷二).....

上卷 三四七頁

贈張徐州。莫辭酒(補遺).....

下卷 六二五頁

嗟哉董生行(卷二).....

上卷 三四〇頁

此日足可惜一首。贈張籍(卷二).....上卷 一九四頁

贈族姪(補遺).....下卷 六一三頁

幽懷(卷二).....上卷 二一二頁

齷齪(卷二).....上卷 三五四頁

汴泗交流。贈張僕射(卷三).....上卷 三七〇頁

忽忽(卷三).....上卷 三七四頁

鳴鴈(卷三).....上卷 三七五頁

雉帶箭(卷三).....上卷 三七九頁

從仕(卷五).....上卷 七四八頁

暮行河堤上(卷一).....上卷 一七七頁

驚驥(卷二).....上卷 三三一頁

貞元十六年庚辰 三十三歲。五月、徐を去る。その十五日、徐軍亂る。復た難を免るるを得たり。  
冬、京師に在り。

海水(補遺).....下卷 五九九頁

歸彭城(卷二).....上卷 二一七頁

送僧澄觀(卷七).....下卷 九一頁

夜歌(卷一).....上卷 一七八頁

河之水二首。寄子姪老成(卷三).....上卷 三五九頁

山石(卷三).....上卷 三六三頁

貞元十七年辛巳、三十四歲。

將歸。贈孟東野・房蜀客(卷五).....上卷 七四四頁

贈侯喜(卷三).....上卷 四〇〇頁

送李愿歸盤谷(補遺).....下卷 六六一頁

貞元十八年壬午 三十五歲。調して國子四門博士を授けらる。

送陸欽州(補遺).....下卷 六五七頁

貞元十九年癸未 三十六歲。監察御史に拜せらる。その冬、抗疏せしを以て罪を得、陽山令に貶せら

る。

哭楊兵部凝・陸欽州參(卷四).....上卷 五四五頁

落齒(卷四).....上卷 五四一頁

苦寒(卷四).....上卷 五四六頁

題炭谷湫祠堂(卷五).....上卷 六六〇頁

貞元二十年甲申 三十七歲。春、はじめて陽山に至る。  
貞女峽(卷三).....上卷 三九九頁

同冠峽(卷二).....上卷 二二〇頁

次同冠峽(卷九).....下卷 三三六頁

答張十一功曹(卷九).....下卷 三三八頁

叉魚。招張功曹(卷九).....下卷 三三〇頁

李員外寄紙筆(卷九).....下卷 三三五頁

縣齋讀書(卷四).....上卷 五三五頁

送惠師(卷二).....上卷 二二一頁

送靈師(卷二).....上卷 二四一頁

和歸工部送僧約(卷九).....下卷 三六六頁

順宗永貞元年(貞元二十一年)乙酉 三十八歲。三月、江陵法曹參軍に移る。  
聞梨花發。贈劉師命(卷九).....下卷 三五八頁

梨花下。贈劉師命(卷九).....下卷 三六四頁

劉生詩(卷四).....上卷 四六七頁

縣齋有懷(卷二).....上卷 二五二頁

醉後(卷二).....上卷 二二二頁

宿龍宮灘(卷九).....下卷 三二八頁

郴州祈雨(卷九).....下卷 三四〇頁

射訓狐(卷五).....上卷 七四一頁

東方半明(卷三).....上卷 三九四頁

赴江陵途中。寄三學士(卷二) ..... 上卷 一五七頁

八月十五夜。贈張功曹(卷三) ..... 上卷 四〇八頁

湘中。酬張十一功曹(卷九) ..... 下卷 三四二頁

郴口。又贈二首(卷九) ..... 下卷 三四三頁

薦士(卷二) ..... 上卷 三〇八頁

合江亭(卷二) ..... 上卷 二六三頁

題木居士。二首(卷九) ..... 下卷 三四五頁

晚泊江口(卷九) ..... 下卷 三四七頁

湘中(卷九) ..... 下卷 三四八頁

謁衡嶽廟(卷三) ..... 上卷 四一三頁

峒巖山(卷三) ..... 上卷 四二〇頁

別盈上人(卷九) ..... 下卷 三四九頁

洞庭湖阻風(卷三) ..... 上卷 四三二頁

岳陽樓。別竇司直(卷二) ..... 上卷 二七五頁

陪杜侍御。遊湘西兩寺(卷二) ..... 上卷 二六九頁

潭州泊船。呈諸公(補遺) ..... 下卷 六三三頁

龍移(卷三) ..... 上卷 三七八頁

永貞行(卷三) ..... 上卷 四二三頁

喜雪。獻裴尙書(卷九) ..... 下卷 三五〇頁

憲宗元和元年(永貞二年)丙戌三十九歲。夏、召して國子博士に拜せられむとし、朝に還る。  
春雪(卷九) ..... 下卷 三五五頁

春雪(補遺) ..... 下卷 六一二頁

春雪間早梅(卷九) ..... 下卷 三五九頁

早春雪中聞鶯(卷九) ..... 下卷 三六三頁

杏花(卷三) ..... 上卷 四三八頁

寒食日出遊(卷三) ..... 上卷 四五〇頁

秋懷詩。十一首(卷一).....上卷 一三三頁

有所思聯句(補遺).....下卷 六三七頁

遣興聯句(補遺).....下卷 六三九頁

贈劍客李園聯句(補遺).....下卷 六四二頁

贈張籍(卷五).....上卷 六七七頁

調張籍(卷五).....上卷 六八一頁

醉贈張祕書(卷二).....上卷 二二四頁

短燈檠歌(卷五).....上卷 七五〇頁

贈崔立之(補遺).....下卷 六〇二頁

元和二年丁亥。四十歲。權知國子博士となり、乞うて東都生を分教す。

元和聖德詩(卷一).....上卷 三七頁

三星行(卷四).....上卷 五〇五頁

酬裴十六功曹巡府西驛塗中見寄(卷四).....上卷 五八九頁

寄皇甫湜(卷五).....上卷 六九一頁

陸渾山火。和皇甫湜。用其韻(卷四).....上卷 五二二頁

元和三年戊子。四十一歲。眞博士に改めらる。

東都遇春(卷四).....上卷 五七六頁

遠遊聯句(卷八).....下卷 二八四頁

贈唐衢(卷三).....上卷 三九七頁

李花。贈張十一署(卷三).....上卷 四三五頁

感春。四首(卷三).....上卷 四四一頁

憶昨行。和張十一(卷三).....上卷 四五七頁

鄭羣贈簞(卷四).....上卷 四七三頁

南山詩(卷一).....上卷 九七頁

題張十一旅舍。三詠(卷九).....下卷 三七〇頁

入關詠馬(卷九).....下卷 三六七頁



答張徹(卷二).....上卷 二九五頁

豐陵行(卷四).....上卷 四七八頁

遊青龍寺。贈崔大補闕(卷四).....上卷 四八一頁

贈崔立之評事(卷四).....上卷 四八八頁

送文暢師北游(卷二).....上卷 二八六頁

送區弘南歸(卷四).....上卷 四九七頁

喜侯喜至。贈張籍張徹(卷二).....上卷 三二三頁

剝啄行(卷四).....上卷 五〇七頁

城南聯句(卷八).....下卷 一八二頁

會合聯句(卷八).....下卷 二二五頁

鬪雞聯句(卷八).....下卷 二二三頁

納涼聯句(卷八).....下卷 二四〇頁

秋雨聯句(卷八).....下卷 二五一頁

征蜀聯句(卷八).....下卷 二六〇頁

同宿聯句(卷八).....下卷 二七二頁

雨中。寄孟刑部幾道聯句(卷八).....下卷 二七七頁

孟東野失子(卷四).....上卷 五一四頁

祖席前字(卷十).....下卷 五〇三頁

秋字(卷十).....下卷 五〇六頁

崔十六少府攝伊陽。以詩及書見投。因酬三十韻(卷四).....上卷 五六〇頁

元和四年己丑 四十二歲。都官員外郎に改められ、東都省に守たり。

送李翱(卷四).....上卷 五九六頁

和虞部盧四酬翰林錢七赤藤杖歌(卷四).....上卷 五五五頁

送侯參謀赴河中幕(卷四).....上卷 五六八頁

同竇牟韋執中。尋劉尊師不遇(補遺).....下卷 六〇九頁

送湖南李正字歸(卷四).....上卷 六〇〇頁

元和五年庚寅 四十三歲。河南縣令を授けらる。

送鄭十爲校理(補遺).....下卷 六七七頁

感春 五首(卷四).....上卷 五八二頁

莎柵聯句(卷八).....下卷 二七六頁

送石處士赴河陽幕(卷四).....上卷 五九八頁

新竹(卷四).....上卷 五三八頁

晚菊(卷四).....上卷 五四〇頁

燕河南府秀才(卷四).....上卷 五九二頁

河南令舍池臺(卷五).....上卷 六三三頁

月蝕詩 效玉川子作(卷五).....上卷 七一八頁

學諸進士作精衛銜石填海(卷九).....下卷 三九三頁

峽石西泉(卷九).....下卷 三七三頁

招揚之罌(卷五).....上卷 六一二頁

元和六年辛卯 四十四歲。行職方員外郎となり、河南より京師に至る。

辛卯年雪(卷五).....上卷 六〇三頁

李花 二一首(卷五).....上卷 六〇八頁

寄盧仝(卷五).....上卷 六一六頁

誰氏子(卷五).....上卷 六三〇頁

醉留東野(卷五).....上卷 六〇五頁

酬司門盧四兄雲夫院長望秋作(卷五).....上卷 六二五頁

石鼓歌(卷五).....上卷 六四〇頁

送無本師歸范陽(卷五).....上卷 六三五頁

送陸暢歸江南(卷五).....上卷 六六九頁

雙鳥詩(卷五).....上卷 六五二頁

元和七年壬辰 四十五歲。復た召されて四子博士となる。

贈劉師服(卷五).....上卷 六五七頁

送進士劉師服東歸(卷五)……………上卷 六七三頁

送劉師服(卷五)……………上卷 七五二頁

和崔舍人詠月 二十韻(卷九)……………下卷 三七八頁

盧郎中雲夫寄示送盤谷子詩兩章 歌以和之(卷五)……………上卷 六八六頁

石鼎聯句(補遺)……………下卷 六八七頁

元和八年癸巳 四十六歲。進學解を作りて宰臣に知られ、擧げられて守尙書比部郎中史館修撰となる。……………六二五頁

和武相公早春聞鶯(卷十)……………下卷 四五三頁

和武相公詠孔雀(卷七)……………下卷 一〇三頁

酬藍田崔立之詠雪見寄(補遺)……………下卷 六三〇頁

元和九年甲午 四十七歲。十一月、考功郎中となり、十二月、知制誥となる。……………六〇八頁

飲城南道邊古墓上 逢中丞過贈禮部衛員外少室張道士(補遺)……………下卷 六三五頁

江漢 一首 答孟郊(卷一)……………上卷 一八二頁

獻山南鄭相公樊員外酬答爲詩 依賦以獻(卷七)……………下卷 九七頁

奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠(卷九)……………下卷 四一二頁

早赴街西行香 贈盧李二中舍人(卷七)……………下卷 一〇九頁

奉酬振武胡十二丈大夫(卷九)……………下卷 三九五頁

送張道士(補遺)……………下卷 六七〇頁

元和十年乙未 四十八歲。……………三八六頁

奉和庫部盧四兄元日朝廻(卷九)……………下卷 三九七頁

寒食直歸遇雨(卷九)……………下卷 四〇〇頁

題百葉桃花(卷九)……………下卷 四〇三頁

春雪(卷九)……………下卷 四〇四頁

戲題牡丹(卷九)……………下卷 四〇五頁

芍藥(卷九)……………下卷 四一一頁

寄崔二十六立之(卷五)……………上卷 七〇二頁

雪後。寄崔二十六丞公(卷七).....	下卷	八七頁
送李尙書赴襄陽。八韻(卷十).....	下卷	四四七頁
示爽(卷六).....	下卷	九頁
元和十一年丙申。四十九歲。中書舍人に遷り、太子右庶子となる。		
人日城南登高(卷六).....	下卷	一三頁
晚寄張十八助教周郎博士(卷七).....	下卷	一一一頁
桃源圖(卷三).....	上卷	三八六頁
感春。三首(卷七).....	下卷	一〇五頁
大行皇太后挽歌詞。三首(卷十).....	下卷	四五七頁
和席八。十二韻(卷十).....	下卷	四五〇頁
和侯協律詠筍(卷十).....	下卷	四六七頁
題張十八所居(卷七).....	下卷	一一二頁
奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄。并呈上錢七兄閣老		

張十八助教(卷七).....	下卷	一一四頁
奉和錢七盆池所植(卷七).....	下卷	一一九頁
記夢(卷七).....	下卷	一二〇頁
聽穎師彈琴(卷五).....	上卷	六六六頁
酬馬侍郎寄酒(卷十).....	下卷	四六五頁
符讀書城南(卷六).....	下卷	一頁
元和十二年丁酉。五十歲。彰義行軍司馬となり、表度に淮西に従ひ、その歸るや、功を以て刑部侍郎となる。		
閒遊。二一首(卷十).....	下卷	四六三頁
贈刑部馬侍郎(卷十).....	下卷	四七五頁
過鴻溝(卷十).....	下卷	四七二頁
送張侍郎(卷十).....	下卷	四七三頁
奉和裴相公女東征途經女兒山下作(卷十).....	下卷	四七六頁

鄆城晚飲。奉贈副使馬侍郎及馮李二員外(卷十)……………下卷 四七七頁

晚秋鄆城夜會聯句(卷八)……………下卷 二九六頁

酬別留後侍郎(卷十)……………下卷 四七九頁

同李二十八夜次襄城(卷十)……………下卷 四八〇頁

同李二十八員外。從裴相公野宿西界(卷十)……………下卷 四八一頁

過襄城(卷十)……………下卷 四八二頁

宿神龜。招李二十八馮十七(卷十)……………下卷 四八三頁

次硤石(卷十)……………下卷 四八四頁

和李司勳過連昌宮(卷十)……………下卷 四八五頁

桃林夜賀晉公(卷十)……………下卷 四八九頁

次潼關。先寄張十二閣老使君(卷十)……………下卷 四八六頁

次潼關。上都統相公(卷十)……………下卷 四八八頁

晉公破賊回重拜台司。以詩示幕中賓客。愈奉和(卷十)……………下卷 四九二頁

示兒(卷七)……………下卷 一四七頁

庭楸(卷七)……………下卷 一五四頁

元和十三年戊戌 五十一歲。

送李員外院長分司東都(卷十)……………下卷 四九〇頁

獨釣。四首(卷十)……………下卷 四九五頁

譴瘡鬼(卷七)……………下卷 一四三頁

元和十四年己亥 五十二歲。佛骨を論じて、潮州刺史に貶せられ、冬、袁州に移る。

元日。酬蔡州馬十二尙書去年蔡州元日見寄之什(卷十)……………下卷 五〇〇頁

琴操。十首(卷一)……………上卷 六八頁

路傍堠(卷六)……………下卷 三二頁

左遷至藍關。示姪孫湘(卷十)……………下卷 五一二頁

武關西逢配流吐蕃(卷十)……………下卷 五二一頁

次鄧州界(卷十)……………下卷 五二二頁

食曲河驛(卷六)……………下卷 三四頁

過南陽(卷六)……………下卷 三六頁

題楚昭王廟(卷九)……………下卷 三二五頁

瀧吏(卷六)……………下卷 三七頁

題臨瀧寺(卷十)……………下卷 五二四頁

將至韶州。先寄張端公使君借圖經(卷十)……………下卷 五二九頁

晚次宣溪。辱韶州張端公使君惠書敘別。酬以絕句。二首(卷十)……………下卷 五二五頁

題秀禪師房(卷十)……………下卷 五二八頁

過始興江口感懷(卷十)……………下卷 五三〇頁

贈別元十八協律。六首(卷六)……………下卷 四五頁

初南食。貽元十八協律(卷六)……………下卷 五六頁

宿曾江口。示姪孫湘。二首(卷六)……………下卷 六〇頁

答柳柳州食蝦蟇(卷六)……………下卷 六三頁

別趙子(卷六)……………下卷 六八頁

元和十五年庚子 五十三歲。春、袁州に至り、九月、召して國子祭酒に拜せらる。

量移袁州。張韶州端公以詩相賀。因酬之(卷十)……………下卷 五三四頁

韶州。留別張端公使君(卷十)……………下卷 五三一頁

次石頭驛。寄江西王中丞閣老(卷十)……………下卷 五三六頁

除官赴闕。至江州。寄鄂岳李大夫(卷六)……………下卷 七二頁

遊西林寺。題蕭郎中舊堂(卷十)……………下卷 五三七頁

自袁州還京。行次安陸。先寄隨州周員外(卷十)……………下卷 五四〇頁

寄隨州周員外(卷十)……………下卷 五四四頁

題廣昌館(卷十)……………下卷 五四二頁

酒中。留上襄陽李相公(卷十)……………下卷 五四六頁

去歲自刑部侍郎。以罪貶潮州刺史。乘驛赴任。其後家亦譴逐。小女道死。殯之層峰驛旁山下。蒙恩還朝。過其墓。留題驛梁(卷十)……………下卷 五四九頁

賀張十八祕書得裴司空馬(卷十)……………下卷 五五二頁

詠燈花。同侯十一(卷十)……………下卷 五〇二頁

雨中。寄張博士籍侯主簿喜(卷十)……………下卷 五五六頁

長慶元年辛丑 五十四歲。兵部侍郎に遷る。

杏園。送張徹侍御歸使(卷十)……………下卷 五五四頁

南山有高樹行。贈李宗閔(卷六)……………下卷 七六頁

猛虎行(卷六)……………下卷 八一頁

奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尚書(卷十)……………下卷 五五八頁

南內朝賀。歸呈同官(卷七)……………下卷 一二六頁

朝歸(卷七)……………下卷 一三一頁

詠雪。贈張籍(卷九)……………下卷 三八二頁

送侯喜(卷九)……………下卷 三九二頁

長慶二年壬寅 五十五歲。使を鎮州に奉じ、王廷湊を叱す。秋、吏部侍郎に遷る。

早春與張十八博士籍遊楊尚書林亭。寄弟三閣老。兼呈白馮二閣老(卷十)……………下卷 五六〇頁

奉使常山。早次太原。呈副使吳郎中(卷十)……………下卷 五六三頁

夕次壽陽驛。題吳郎中詩後(卷十)……………下卷 五六五頁

奉使鎮州。行次承天行營。奉酬裴司空(卷十)……………下卷 五八〇頁

鎮州路上。謹酬裴司空相公重見寄(卷十)……………下卷 五八二頁

鎮州初歸(卷十)……………下卷 五六六頁

同水部張員外。曲江春遊。寄白舍人(卷十)……………下卷 五六八頁

和水部張員外宣政衙賜百官櫻桃詩(卷十)……………下卷 五七一頁

送桂州嚴大夫(卷十)……………下卷 五七六頁

奉和僕射裴相公感恩言志(卷十)……………下卷 五八三頁

奉和裴僕射相公假山。十一韻(卷七)……………下卷 一六二頁

奉和李相公題蕭家林亭(卷十)……………下卷 五八六頁

奉和僕射相公朝廻見寄(卷十) ..... 下卷 五八五頁

和李相公攝事南郊覽物興懷。呈一二知舊(卷七) ..... 下卷 一五九頁

和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公。十六韻(卷十) ..... 下卷 五八八頁

奉酬天平馬十二僕射暇日言懷見寄之作(卷十) ..... 下卷 五七八頁

鄆州谿堂詩(補遺) ..... 下卷 六四六頁

長慶三年癸卯。五十六歲。京兆尹となり、御史大夫を兼ね、冬、復た兵部侍郎となり、吏部侍郎に遷る。

早春。呈水部張員外。二一首(卷十) ..... 下卷 五七四頁

送鄭尙書赴南海(卷十) ..... 下卷 五〇七頁

送諸葛覺往隨州讀書(卷七) ..... 下卷 一六九頁

長慶四年甲辰。五十七歲。夏より疾を得、官を辭して家居す。冬歿す。禮部尙書を贈り、諡して文といふ。

與張十八。同效阮步兵一日復一夕(卷七) ..... 下卷 一六六頁

翫月。喜張十八員外以王六祕書至(卷七) ..... 下卷 一五七頁

南溪始泛。三首(卷七) ..... 下卷 一七三頁

(以下無年可攷)

君子法天運(卷二) ..... 上卷 二一四頁

條山蒼(卷三) ..... 上卷 三八二頁

贈鄭兵曹(卷三) ..... 上卷 三八三頁

古意(卷三) ..... 上卷 四〇五頁

青青水中蒲。二首(卷四) ..... 上卷 五一一頁

嘲魯連子(卷五) ..... 上卷 六七五頁

雜詩(卷五) ..... 上卷 七〇〇頁

答孟郊(卷五) ..... 上卷 七四六頁

病中贈張十八(卷五) ..... 上卷 六九三頁



病鷗(卷六).....	下卷	一六頁
華山女(卷六).....	下卷	二二頁
讀皇甫湜公安園池詩。書其後。二首(卷六).....	下卷	二七頁
雜詩。四首(卷七).....	下卷	一三二頁
讀東方朔雜事(卷七).....	下卷	一三七頁
木芙蓉(卷九).....	下卷	三六八頁
梁國惠康公主挽歌。二首(卷九).....	下卷	三七四頁
酬王二十舍人雪中見寄(卷九).....	下卷	三九一頁
送李六協律歸荆南(卷九).....	下卷	四〇一頁
盆池。五首(卷九).....	下卷	四〇八頁
遊城南。十六首(卷九).....	下卷	四二八頁
太安池(卷十).....	下卷	四五四頁
遊太平公主山莊(卷十).....	下卷	四五五頁

晚春(卷十).....	下卷	四五六頁
廣宣上人頻見過(卷十).....	下卷	四六一頁
枯樹(卷十).....	下卷	四九九頁
答道士寄樹雞(卷十).....	下卷	五一頁
芍藥歌(補遺).....	下卷	五九五頁
苦寒歌(補遺).....	下卷	六〇七頁
嘲鼾睡。六首(補遺).....	下卷	六一七頁
晝月(補遺).....	下卷	六二三頁
辭唱歌(補遺).....	下卷	六二七頁
知音者誠希(補遺).....	下卷	六二九頁
池上絮(補遺).....	下卷	六三六頁

309  
65

# 發行所

電話神田一八五三七番  
振替東京一八五三七番

# 國民文庫刊行會

## 有所權著作

昭和四年五月十五日印刷  
昭和四年五月十五日發行

續國譯漢文大成 文學部第八帙

【非賣品】

編輯者兼

國民文庫刊行會

東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作

東京市本郷區西片町十番地

印刷者

渡邊一郎

東京市小石川區西古川町廿五番地

印刷所

中外印刷株式會社

東京市小石川區西古川町廿五番地

續國譯漢文大成 文學部第八帙  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

終